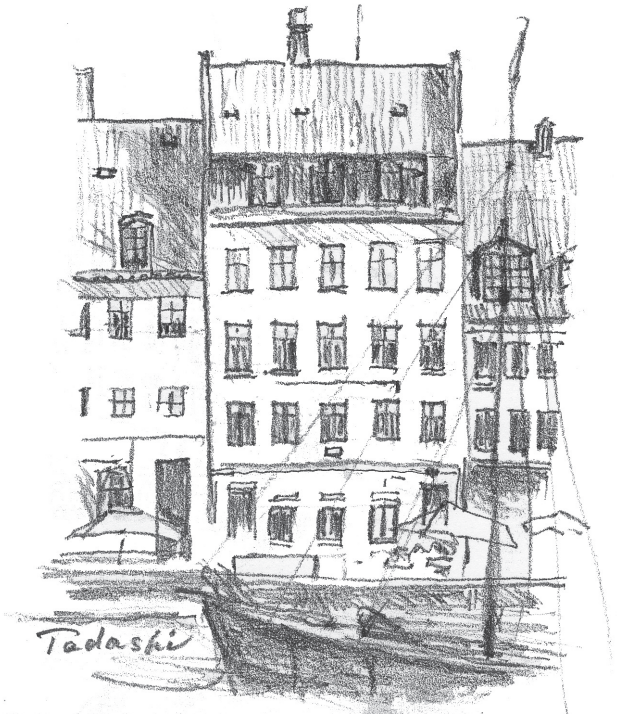
Carl Thrane

クーラウ伝記



翻訳：山口和克、石原利矩　監修：石原利矩

インターナショナル・フリードリヒ・クーラウ協会

クーラウ伝記

カール・トラーネ

翻訳：山口和克、石原利矩
監修：石原利矩

発行：インターナショナル・フリードリヒ・クーラウ協会

本冊子の刊行にあたり

石原　利矩

この冊子はIFKS会報2013年版の付録として会員のみに配布するものです。

カール・トラーネ Carl Thrane (1837~1916）の「クーラウ伝記」は後のクーラウ研究の基礎となった重要な文献です。1875年に出版された「デンマークの作曲家」と題するワイセ Weyse、クーラウ Kuhlau、ハルトマン Hartmann、ゲーゼ Gade についてデンマーク語で書かれた著書の中の1部分です。283ページ中クーラウの記述は120ページを占めます。

トラーネは法律家でデンマーク最高裁判所の秘書が本職でしたが、その傍ら音楽の著述をした人です。幼少期にクーラウの弟子、ゲバウアー J.C. Gebauer にピアノの指導を受けています。トラーネはクーラウの没した5年後に生まれたので直接会ってはいません。「クーラウ伝記」の出版はトラーネが38歳の時、クーラウの死後43年経過しています。彼が調査を始めたときは生前のクーラウと面識のあった人の何人かは生存していました。クーラウの遺族の記憶や手紙、当時のクーラウの知人の口述、出版社宛の手紙類の筆写など「クーラウ伝記」を上梓するため、自ら足を使い調べた記録文書は現在デンマーク王立図書館に保存されています。本書に引用されている手紙類は現存しているものもありますが、第2次世界大戦で失われているものもかなりあります。

トラーネの後に続くクーラウに関しての出版された重要な文献には以下のようなものが挙げられます。

ゲーオ・St. ブリッカ Georg St. Bricka 1873　『ウイリアム・シェイクスピア』ピアノスコアの序文にクーラウ略伝　デンマーク語

カール・グラウプナー Carl Graupner 1930　伝記　博士論文　ドイツ語

ヨルン -L・バイムフォール Jörn-L. Beimfohr 1971　ピアノ曲の分析　博士論文　ドイツ語

ダン・フォゥ Dan Fog 1977　作品カタログ

ゴーム・ブスク Gorm Busk 1986　劇場音楽の研究　その一つの章に伝記　博士論文　デンマーク語

ヨーアン・エーリクセン Jørgen Erichsen 2011　伝記　ドイツ語

グラウプナー以降の文献はトラーネの「クーラウ伝記」に負うものが大部分です。もしもトラーネが「クーラウ伝記」を著さなかったらクーラウの生涯は今日以上に闇に包まれていたことでしょう。

その後の研究でトラーネの記述にも訂正すべきものがいくつかありますが、本書ではそのままを記載しています。なお巻末に作品目録がありますが、訂正事項もありますのでダン・フォゥのカタログにゆずることにして今回の編集ではカットしました。ただし作品番号にaとbを付けたのはダン・フォゥでなく、トラーネです。

この冊子の翻訳はクーラウの生誕100年を記念してドイツで出版されたトラーネの「クーラウ伝記」のドイツ語翻訳の復刻版を主として用いています。不明な個所はオリジナルのデンマーク語版を参考にしました。

なお、この翻訳はIFKS会報の第2号から6号に亘り1章ずつ掲載されたもので、第1章は石原訳、第2章～第6章の翻訳は元IFKS理事、故山口和克氏が行ったものです。永らくIFKSは本書の翻訳をすべて山口氏の訳に統一して出版をする計画を立てていたのですが、2012年2月14日の山口氏の急逝で断念せざるを得ませんでした。原文の注はそれが書かれている段落内の適当な個所に挿入しました。段落の初めに字下げが無いものはその前の段落内の続きの文章です。判りにくい人名、地名などは欧文を適宜入れています。特にデンマーク語の日本語表記は難しさがあります。クーラウについて理解を深めるため、本冊子が皆様のお役に立てれば、故山口和克氏の想いと同様、編者一同の喜びとするところです。

2013年9月

第１章

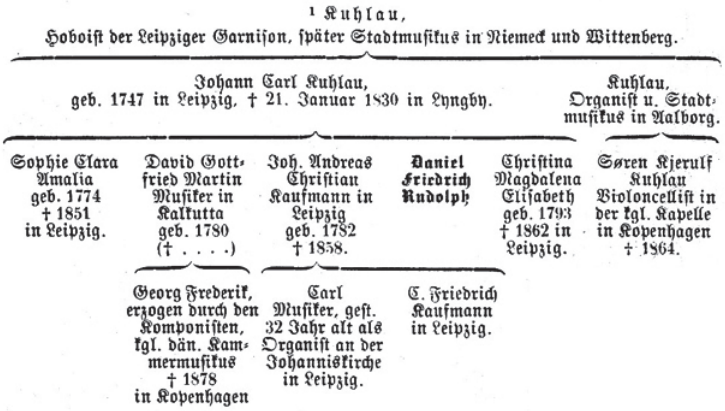
ユルツェンの聖マリア教会（クーラウが洗礼を受けた教会）

クーラウのように、その幼年時代が知られていない今世紀の作曲家はそれほど多くない。この闇に包まれた中から、時たま浮き上がって見えてくる事柄があるが、隠れた道を照らす一条の光に過ぎず、全貌をあきらかにするものではない。全体的に見ればクーラウについて書かれたことはあまり多くはない。印刷物になっている資料は必ずしもそのまま信頼していいものとは限らず、簡単な略歴や個々の出来事の消息のような内容に過ぎないものが多い。以下に述べることがらはクーラウと知り合いで彼と関係のあった多くの人々が覚えていて進んで話をしてくれたこと、ならびに印刷物、加えて彼自身の手紙や彼の親族＊の手紙に基づいて書いたものである。その他、古い文書や種々雑多な公文書も参考にした。

＊注：クーラウの甥で、ライプツイッヒで商人をしているＣ．F. クーラウは伝記執筆に大変興味を示してくれて、自分の所有する手紙類を貸してくれ、知っていることはすべて教えてくれた。ライプツイッヒのブライトコップフ＆ヘルテル社は同様に彼らの所有する全てのクーラウの手紙類を快く著者に提示してくれた。

ダニエル・フリードリヒ・ルドルフ・クーラウは 1786 年 9 月 11 日、ハノーファーのユルツェン Uelzen で生まれた。父親のヨハン・カール・クーラウはハノーファー連隊音楽隊の楽士（オーボエ奏者）であり、音楽を教えることにも熱心であった。彼は 1770 年、ハノーファー生まれのシャルロッテ・ドロテア・ゼーガーと結婚をし、11 人の子供をもうけたが、内 6 人は幼少時に死亡し、3 人の息子と 2 人の娘が成人した。フリードリヒは全ての子供達の内で下から 3 番目で、男の兄弟の中では一番末の子供である。以下の家族構成の図が示すようにクーラウの家系は総じて音楽の才を示し、それぞれ多くの場合、音楽を職業としている。

----- 家系図 -----



フリードリヒ・クーラウの生涯で重要な最初の出来事は彼が片目を失うこととなった不幸な事件である。彼がリューネブルク Lüneburg の両親のもとにいた 9 才半の時のこと、ある暗い晩、ビンを持って何かの＊使いに出されたのだが、靴屋の前で変わったランプに目を留め立ち止まった。その光をもっと近く寄って見ようとして階段を二、三段昇りかけたとき、彼を呼ぶ声が聞こえた。彼は急いで階段を降りようとして転び、ビンに頭を打ちつけ、ビンは割れて破片が頭部と右目に突き刺さった。彼は哀れな状態で家に運ばれ、痛みに耐えて永く病床に臥していたが、結局、目を失うことになった。目が腫れ上がったクーラウを見るのは周りの者にとっていたたまれないことであった。

＊注：彼が何の使いに出されたのかについての言い伝えは様々である。ミルク、水、インク、強酒（火酒、ブランデー、ウイスキー）など、更には食用油脂のために陶器の瓶を持って、など。あとにも出てくるが、クーラウ伝記につきまとう言い伝えの詳細は常に不確かなものであるという一例である。

当時ユルツェンに住んでいた姉、アマリエに宛てた 1796 年 5 月 21 日付けのリューネブルクからの彼の短い手紙にはこう書かれている。「お姉さん！財布をくれるって約束したでしょう。財布がほしいなあ。まだ痛みがあるのでもう書けません。だけど、財布を早く送ってください。お姉さん、痛みがなくなると、うれしいのだけど。」それに続く姉宛のもう一つの手紙には「素敵な財布と絹の靴下を有り難う。有り難いことにもうだいぶ良くなりました。僕と同じようにお姉さんも元気になって下さい。頭の傷が残っているだけで頬の傷はもう治っています。もう貼り薬を 12 ビンも使ってしまいました。でももう使いません。もうすぐ美しい新しいアリアを思いつくでしょう。思いついたらそれをお姉さんに写して送ります。眠くなったので終わりにします。」最後に 1796 年 6 月 16 日の手紙には次のような文面がある。「お姉さん！ぼくはほとんど元

気になりました。目はすぐ良くなります。頭の 5 箇所の傷もすぐ治ります。僕が良くなったらお姉さんの所に来るようにと手紙をくれましたね。喜んで行きますが、お姉さん、僕の頭が丸坊主になっているのを見て変に思わないでください。ごきげんよう。常に変わらぬ親愛を込めて。弟の D.F.R. クーラウより。追伸：すぐ返事下さい。」

ここに見る如くクーラウ少年はアリアのことに触れており、すでに父親の指導を得ていたことがわかる。彼が病床に臥していたために周りの人が彼の音楽的才能に気づいたのである。暇つぶしに何か弾けるようにと鍵盤楽器（訳注：クラヴィコード）をベッドの上に置いてくれたが、すぐにこの暇つぶしが最も気に入るものとなったようである。これで両親は何が彼の将来の職業であるべきか、そして、それは音楽であると考えるに至った。すっかり元気になってから、クーラウは隻眼の幼い新進音楽家として出発することになった。音楽の専門家が世話を焼いてくれて、ピアノ演奏のためオルガニストのアーレンボステル Ahrenbostel の教えを受けることとなった。「眼は精神の鏡である」と言われている。この少年の目は両眼の美しさを併せ持つもののように見えた。晩年の彼を知る人はみな、彼の目が美しく素晴らしい表情をしていたと言っている。彼は自身のこの事件をことのほか幸運なことだったといつも考えていた。これが彼の運命を決したからである。彼はよく言っていた。「片方の目だけでも両眼がある人と同じようにちゃんと楽譜が読める」のだと。

クーラウが成功を収めるに至った理由の一つは、まず第一にフルートという楽器のおかげであった。これについては後に述べるが、芸術家としての彼の生涯に重要な役割を果たすことになるのがフルートなのである。クーラウは兄のアンドレアスと共にリューネブルクのコルマン学校に通っていた。言い伝えによると、この学校の指導方針はかなりきびしいものであったという。この学校には生徒達に干しぶどうとアーモンドを入れた袋を持って来させて、振る舞わせる習わしがあった。子供のフリードリヒは貧しさのためこれが出来ない正に唯一の者だったので深く傷ついていたのだが、たまたまある日、フルート愛好家の香料商人を訪れることがあった。香料商人はこのついでに少年に父親から何かフルートの楽譜を借りられないかと訊ねた。クーラウの父はヴァイオリンの他にフルートもやっていたからである。父のフルートの楽譜が探せなかったのか、あるいは自分で作曲したほうが楽しいと思ったのか、クーラウはフルートのための舞曲と小品をいくつか作曲して香料商人に手渡すことにした。香料商人はそのお礼としてお金を払う代わりに干しぶどうとアーモンド入りの大きな袋を与えて、この小さな芸術家の労をねぎらった。フリードリヒはこれで窮地を脱し、今や学校で一目置かれる存在となった。予言者がこのような事情を知ればきっとこう予言するだろう：「音楽は将来、君に名誉と裕福な暮らしをもたらすだろう」と。もっと優れた予言者なら次のように付け加えるだろう：「運命の綾はこの良き吉兆にある条件をつけている、それはフルートという条件である」と。フルートがなければ彼の名前はヨーロッパ中にあまねく知られることにはならなかったであろう。もうひとつの予言、「裕福」の方は、まったく一度もやってきてはくれなかったが、彼が非常に困窮した時に彼を助けたのはいつもフルートであった。

クーラウの生涯でヴェールに覆われている時代がある。すなわち彼が目を失った 1796 年から 1800 年か 1801 年にハンブルクに来る時までの 4~5 年間である。この頃には彼の父親はすでに軍楽隊を辞めており、ハンブルクで音楽教師として働いていた。この不明な期間について、以下に述べることは確実とは言い切れないが推量することは可能だ。クーラウの少年時代に関する印刷資料では、ブラウンシュヴァイク Braunschweig が舞台となっている。フェティス Fétis は伝記辞典の中で、両親はクーラウをブラウンシュヴァイクの声楽の学校に行かせたと述べているし、日付は書かれていないが明らかに彼の少年時代に書かれた母親の手紙から、両親が住んでいる所とは別の町に彼がいること、そこで牧師の息子二人に音楽を教えていることが読みとれる。この手紙は当時ハンブルクに住んでいた娘アマリエ宛のもので、少ない行間から息子に対する深い愛情と慈しみがにじみ出ているのが読みとれる。フリッツはとても熱心で、牧師は彼を高く評価していることを述べ、そしてクーラウに手紙を書いてやって頂戴、(あなたの手紙をとても欲しがっているから) と彼女は書いている。続けて、牧師の二人の息子達を速やかに、しかも同様に進歩させるのが如何に大変かを述べ、最後に「毎週一通手紙が届きます。いつも愉快で分別のあることが書いてあります」と結んでいる。そういうわけでクーラウが滞在していたその町はブラウンシュヴァイクであったらしい。ほぼこの期間に --- 何年間とは言えないが --- 何人かの音楽家がこの町で教育を受けていた。中にはクーラウよりも 2 才年上のシュポア Spohr や、現在あまり知られていないヴィーデバイン Wiedebein が居た。ヴィーデバインはクーラウよりも何歳か年上で子供の頃からずっとブラウンシュヴァイクで育った人で、クーラウと知り合いであったことは分かっている。クーラウが後年ライプツィッヒのヘルテル社にヴィーデバインの略歴を書いている手紙が残っているからである。シュポアは自伝の中でクーラウのことについては何も述べていない。しかし、彼らは疑いもなくお互いに知り合い

であった＊。

＊注：クーラウは彼のOp.33 のヴァイオリンとピアノのためのソナタをシュポアに献呈している。そして後年外国に行く若い芸術家にたびたびシュポア宛の推薦状を手渡している。

家族の伝承ではクーラウはブラウンシュヴァイクで軍楽隊のための何らかを作曲したと言われている。少年時代、クーラウは家々の門前で歌を歌って糊口をしのがなければならなかったという話がしばしばされるが、この話は誤解から生れたものであることは確かである。当時の教師の報酬の大半は篤志の寄付でまかなわれていた。それで寄付集めに、教師は日を決めて生徒を引き連れて町をまわり、寄付金箱を手に家々を歌いながら歩いたものであった。そうであれば、学校のために生徒だけで寄付集めをすることもあり得ただろう。シュポアの自伝には子供の学校時代、こうやってブラウンシュヴァイクの通りを引き回されたことを述べている。恐らくクーラウが「道で歌った」と言う話も同じようなことに基づくものであろう。クーラウの住んでいたところは息子達の音楽教育をした牧師の家の可能性もあるが、ギムナジウムに寄宿していたということも考えられる。ライプツィッヒのトーマス学校のようなギムナジウムでは住居と食事が与えられる代わりに、生徒たちは賛美歌のコーラスの義務があり、学校の寄付を得るために民家の前で歌うことも義務であった。このような生徒は「合唱生徒」Chorschüler と呼ばれていた。クーラウは子供の頃素晴らしい声をしていたので、合唱生徒としてギムナジウムに寄宿していたという確率が高い。おそらくブラウンシュヴァイクで。そう考えるとフェティスの言っている「ブラウンシュヴァイクの声楽の学校」という記述と一致する。ともあれ、この学生時代にクーラウはピアニストとしての教育も同時に受けていた。

次にクーラウを迎えるのは世紀の初頭のハンブルクである。両親の収入はわずかしかなかったので、彼は自分自身でやりくりをしなければならなかった。だが、彼の才能はまもなく力を発揮しはじめ、ピアノ教師として結構な収入がないわけではないという状態になる。しかしながらこれだけでは彼の青雲の志が静まることはない。彼の芸術家魂は力強く湧き起こり始め、より高度な芸術的向上への願いが彼自身の中で目覚めたのである。そして、彼はハインリッヒ・ハイネ Heinrich Heine が厳しく批判した俗物の町、ハンブルクにいては芸術家の意気込みがくじかれてしまいはしないかと悩んだが、若者特有の快活で何にも打ち勝つ陽気さ、これはクーラウの芸術のまぎれもない特徴となるものであるが、そのおかげで彼は毅然として志を崩さず、先へと進んだのであった。1800 年、あるいは少し前に彼はブレーメンへの短い演奏旅行を行った。彼の青年時代がどんな風であったか、何を考え、何を感じていたかはブレーメンに住んでいた兄アンドレアスに宛てた次の手紙の中にはっきりと表れている＊。

＊注：この手紙には日付がないが、兄のブレーメン在住期間がわかっているので、1804 年以前に書かれたことは、はっきりしている。

その手紙は「希望への賛歌」と題した、荘重で、おどけた短詩で始まりこう綴られている。「僕が兄さんに不安のことを書き送った丁度その日、お兄さんもハンブルグでご存じの僕の唯一の友人リヒテンホルト Lichtenhold ＊と一緒に芸術家としての我々の置かれているハンブルクでの立場を考えてみました。

＊注：名前の書き方が不明瞭で、リヒテンフェルト Lichtenfeld とも読める。

我々がどんなに惨めな状態にあるかを、お兄さんは考えることもできないでしょう。我々はハンブルクではとても出世はできない、決してできないことを考えると、胸がむかむかします。お金は稼げます。たしかに。この世でお金だけたっぷりあるなんて、僕たちはそんなのはごめんです。もし今の状況を変えようとしなければ、僕は永久に哀れなピアノ教師としてとどまり、一歩の前進もないでしょう (いくら望んでも)。リヒテンホルトの状況も同じです。少なからざる才能、素晴らしい声を持ち、その他の資質があるにも関わらず、彼はここの劇場ではいつでも下積みです。だから二人とも、このいわゆる愛すべき聖なるハンブルクにいると、たらふく単調さを食べてお腹を壊してしまいます。ますますひどくなって完全な便秘になりそうです。今、我々二人はハンブルクにお尻を向けて --- いや、背中を向けてと言うべきでした --- 広い世界がどんなものか見たいと思います。我々二人はヴィルトゥオーゾとして演奏旅行を計画し、ブレーメンで最初の演奏会をしようと考えています。ただ、お兄さんが希望する日よりも二、三週、やむを得ず遅くなってしまうのですが。多分 11 月の終わりになるでしょう。」手紙は次の詩で結ばれている。

終わりよければ全て良し。
さあ、また詩作を始めよう。
汝、名誉あるドイツ人魂よ
韻が踏めれば僕も一人前？

僕の到着を通知する
オーケストラの編曲をする
髭にバターをくっつけて
物笑いにはならないように
部屋の模様替えをして
泊めてくれますように

我々を暖かく迎えてくれるなら
大きなのっぽの二人を
受け入れてくれるなら
ともかくちゃんと勉強する

昔、僕たちがコルマン学校のイスに座って
Schwulstkuchen* を食べたとき
僕たちがこんなにも沢山の幸運に恵まれるか
誰が考えたでしょうか。

書簡体は短い
だから詩を書こう
一体全体この地の上で
どんな奴に二人がなるのか

* 訳注：Schwulstkuchen　北ドイツでは油で焼いたこね粉菓子を意味する

　こうして、この芸術家たちはブレーメンにやってきて演奏会を行った。ところがあまりに永くブレーメンにいたので、収入がすっかり無くなってしまい、徒歩でハンブルクまで帰らなければならなかった。それにも拘わらず、ユーモアを二人は忘れなかった。クーラウは畑の溝や用水路を飛び越え飛び越え歩きに歩いたが、とうとう、きたない泥の溝にはまってしまった。詩人魂がこんこんと湧き出るふざけ好きの我らの若人は、旅籠屋に着くなり、紙をとって、すぐさま歌えるようにこの出来事を「溝とすべて」という詩にした。*

* 注：この歌曲は少々長いので、ここでは最初の２番までと最後の歌詞を掲載する。

元気さっぱりして旅人達は退散する
ヤッホー、ヤッホー、ヤッホー！
不機嫌な者、快活でない者よ、墓穴が待ってるぞ
ヤッホー！
暁の女神を左に、銀の月の女神の光を右に
彼らを喜ばすのはそれだ
太陽の緋色の輝きが夜を追い払う
ヤッホー！

この世で常に変わらず素晴らしいものは
ヤッホー！
若者がまっさかさまに溝に落っこちる
やれやれ！やれやれ！やれやれ！

なんとずぶぬれ、がちがち凍え
酒瓶をつかみ一気に飲み干す

若者がまっさかさまに溝に落っこちる
やれやれ！

求めるものには与えられる、我らは見つけた
ヤッホー！
親切な旅籠やで気分は落ち着く
ヤッホー！
おいしい夕食が待っている
病雌牛のひどい肉なんかではない
美味しいにおいがぷんぷんだ、いざ、友よ。手に取ろう
ヤッホー！

この時期クーラウは同様な旅行を何回か行ったらしい。ベルリンにも、多分リヒテンホルトと一緒に行ったようだ。こういった旅行は金銭目的と言うよりも冒険的な興味の方が勝ったもので、金銭の点ではいろいろと厳しいものがあったと思われる。このベルリン旅行では、ある伯爵夫人が彼の才能に注目して、しばらくの間、彼の世話をしてくれた。彼の作品 1 はヴィルモーデン＝ギンボルン Wilmoden=Gimborn 伯爵夫人に献呈されていることからこの話の信憑性は高い。

この元気の良い、前向きな若者を更なる芸術家の道に導く役に当たった人は、カタリーナ教会の音楽監督兼カントールの E. F. G. シュヴェンケ Schwenke だった。しかし、この人物がクーラウの面倒を見ることになったその瞬間から、クーラウは悟らざるを得なかった。目標とする芸術の聖殿に至る道はクーラウにとって長く、困難なものであることを。シュヴェンケは卓越した理論家で、誰にでも目に付く特徴は「刺すような批評」であった。悲しいかな、ハンブルクの舞台に登場しようとする旅回りの芸術家には、シュヴェンケのひいきや親好なしにはその保証は叶うものではなかった。シュヴェンケは綿密な校訂で知られ、ハンブルクの批評界に君臨していた。批評のペンを手にしない私生活においてさえもなお一層批評家であって、モーツァルトやベートーヴェンのような彼が心から賛嘆している人物についての意見を才知あふれ、面白く開陳して、団らんの場で音楽についておしゃべりを楽しんでいる時でも、何者も彼の批判の目を免れることは出来なかった。シュヴェンケの所には毎朝早くから行かなければならなかった。シュヴェンケはずっとクーラウに不満を抱いていたせいか、彼に格別に気を配るということはしなかった。いつもこの若い芸術家の持ってくる作品にはきまって無慈悲な判断が下されるのである、「てんで駄目」と。ある日シュヴェンケを最悪に怒らせることになってしまった。シュヴェンケが不在で、家にいた元気の良い活発な若い娘達が面白がって、このおとなしい、女性の前でもじもじしている若者にシュヴェンケのパイプを吸わせたのである。しかし、シュヴェンケはこんなおふざけが見過ごせる人ではない。彼が家に帰ってみると、才能のない学費免除生徒が他人のパイプを勝手に使うなどという、どう見てもひどい軽視行為をやったことに気づいた。タバコとパイプはシュヴェンケの大切なものであり、相応しくない者が楽しむものでないと言うことをクーラウはきつく思い知らされた。しかし、この出来事は間もなく大成功のよろこびに変わるのである。ある日、シュヴェンケがピアノの前に向かって、クーラウの作品に目を通し始めた。クーラウは神妙にして、あのいとわしい「てんで駄目」という声を聞かされるかとかしこまっていると、辛辣な先生の口から突然「クーラウさん、パイプにタバコをつめなさい」という言葉が響いた。こんな幸運な形で認めてもらえるとは考えてもいなかったが、クーラウはこの言葉が呼び覚ました驚きと魂の喜びを決して忘れることがなかった。晩年になってからもこの話をよくして、あれは生涯における大成功の一つだと言ったものであった。

オルガニストのゲバウアー Gebauer はかつてクーラウの弟子であって、小さなパイプをくゆらしながら毎日曜日、リュンビューの彼の家に通った。クーラウの家に着くとパイプを人目につかぬように注意深くポケットにしまうのであったが、ある日パイプの先がポケットから覗き出してしまった。クーラウはこれを見つけ、見せろ見せろと言い張って、この慎み深い生徒にパイプを取り出させて面白がった。この時にもクーラウは上機嫌でシュヴェンケの話をした。クーラウは大の愛煙家であったが、それは例の大成功のせいかどうかは分からない。当時の音楽家は大体、パイプタバコを好む人が多かったようである。シュポアは A. ロンベルク Romberg が口からパイプを離そうとせず、平然とカルテット演奏したことを書いている。B. ロンベルクは彼の最高に難しい協奏曲をパイプをくわえ、火の消えない内に演奏するという曲芸技を見せたと言われている。タルベルク Thalberg のピアノに向かう姿勢は真っ直ぐであったが、練習するときには長いパイプを口にくわえ、その長さ

で姿勢を正す様にしたからだと打ち明ける人もいる。クーラウも喫煙にいつも耽溺し、パイプ無しではいられなかったということは偉大な芸術家の共通点といえよう。付言しておきたいことは、クーラウに最初に「さん」付けで言った有名な呼びかけ以来、シュヴェンケはいつも敬意をはらってクーラウさんと呼びかけるのであった。

しかしながら全般的に言ってクーラウは自分自身が教師であった。自分の略歴を述べたある手紙の中で彼はシュヴェンケについては、いくらか和声学を学んだ教師と述べているだけである。キャリアーを始めるにあたり、先ずピアノ演奏家であることが眼目であった。ピアノについても、折に触れて何らかの指導を得たにちがいないが、実質的には自ら鍛錬を積まなければならなかった。彼が演奏できた他の楽器、フルート、ヴァイオリン、チェロに関して最初の教師は恐らく父親であったろう。しかし彼はこれらの楽器に熟達したとは言えない。彼のそれほどでもないフルート演奏についての自身の証言は後で述べる。

シュヴェンケはクーラウを全く不当に評価していたと感じていたのは確かなようだ。それ故、彼は機会があればクーラウを激励するよう取り計らった。ある晩クーラウは音楽界の重要人物の集る会にシュヴェンケから招待を受けた。シュヴェンケは集まった人たちにクーラウを紹介して、「かつての生徒だが、すっかり成長して自分にはもはや何も教えることがないのです」と言った。こうして突如として彼は若い前途有望な音楽家となった。しかも、これ以上のことがあろうか、シュヴェンケの手厚い庇護のもとにである。ハンブルクの生活は彼にとって違う様相を呈してきた。そして彼はこの町でピアニストとして公に登場した。彼が 1808 ～ 9 年の冬ハンブルクで「愛好家のための演奏会」を催したことは明らかである。その際の入場券には、とてもきれいに飾られている楕円模様に描かれた謎のカノンによって主催者クーラウの名前が囲まれている。コペンハーゲンではクーラウはこの入場券を名刺として使っていた。いくつかの小品はすでに出版していたが、1810 年 5 月に前述した作品（Op.1 ～ 3）がライプツイッヒのホフマイスター Hofmeister 社から出版された。二、三ヶ月後に彼はブライトコップフ＆ヘルテル社に一曲のピアノソナタを送ったが、これは「彼は有名でない」という短い返事をつけて送り返されてしまった。クーラウは書状を添えてそのソナタを再度、出版社に送った。これにはシュヴェンケの推薦文が付してあり、「ハンブルクのクーラウ氏の件にてヘルテル Härtel 氏と親しく約定いたし光栄に存じ候、今後、ふたたび推薦状の要なき様お取りはからい願いたく存じ候。追伸、このソナタ批評を音楽新聞に執筆いたすべく・・」。

このソナタがすぐさま同社から出版されたのは勿論である。そうこうするうちにナポレオンが台頭してきて、1810 年の終わりにはハンブルクはフランスの支配下に置かれた。ある日クーラウは徴兵名簿に載ったのを知らされた。ナポレオン軍が左目だけしか使えない兵士をも必要としたのかは考えにくいが、そのような事情があったのかも知れない。いずれにせよクーラウは軍楽隊につっこまれてしまうことを恐れたのかも知れない。幸運なことにフランス軍の兵士を彼の音楽で鼓舞するなんてことは、まったく考えに浮かんでこなかったし、その気にもならなかった。彼はすぐさま亡命する事を決意し、カスパール・マイヤー Kaspar Meier という名前を用いコペンハーゲンにやってきた。クーラウがデンマークにやってきた 1810 年の終わりのハンブルク新聞には、告示された徴兵リストにしたがい帰国を促す「若者たちへの勧告」が沢山載っている。それにはきまって、「もし応じなければ全財産の没収と最前線への派兵」と書いてあった。クーラウは財産に関しては失うものは何もなかった。しかし「最前線の派兵」は彼にとっては恐ろしいことだった。そして彼はしばらくの間コペンハーゲンに隠れて留まることが賢明と判断したのであろう。このようにして我々は彼を獲得したのである。彼がデンマークの聴衆の前にデビューしたのは 1811 年 1 月 23 日、王立劇場の演奏会であった。クーラウはこの演奏会で、少し前にハンブルクで作曲したピアノ協奏曲ハ長調と、自作の大曲、音画「海の嵐」* を演奏した。このようにして彼は、後に彼の才能の花を咲かせる舞台となる国に初めて公に登場した。彼はこのピアノ協奏曲を「友人ワイセ Weyse」に献呈した。この人物とは彼はデンマーク音楽史の中で切っても切れない間柄となった。

* 注：ポスターには次のように書かれている。

演奏会
国王の承認によりハンブルクのピアニスト、クーラウ氏は 1 月 23 日、水曜日、夜 7 時、王立劇場で声楽と器楽の大音楽会を行う。
曲目は次の通り

第一部

１．モーツァルトの序曲

２．リギーニ作曲　アリア　歌手：ベルトハイム夫人

３．ピアノ・コンチェルト　作曲・演奏　クーラウ氏

第二部

１．モーツァルトの序曲

２．２本のオーボエのコンチェルタンテ　作曲　宮廷音楽家バールト氏
演奏　同氏とケッペン氏

３．音画「海の嵐」

１、静かな海

２、嵐の接近

３、嵐の猛威

４、嵐が遠のき空が明るくなる

５、喜びの漁師の歌と、その歌の変奏曲でこの演奏会を締めくくる

第２章

レーウェンスキョル男爵邸（オペラ『盗賊の城』を作曲した館）

デンマークに到着後、間もなくオペラの第一作『盗賊の城』をクーラウは作曲した。このオペラは『若さと狂気』や『睡眠薬』と並んで、人気の演目と成り、劇場のレパートリーとしての地位を永らく獲得した。クーラウは、それまで劇場音楽分野ではほんの二, 三の声楽曲しか試みていない。1811 年 11 月 27 日のコンサートでオシアン Ossian の『コマラ』Comala の一情景が上演されたくらいである。クーラウの演劇における才能と独自性にいち早く着目したのは、詩人エーレンスレーヤー Oehlenschläger であった。伝えるところによれば、二人はたまたま同じ家に住んでいて、エーレンスレーヤーがいたフロアの上にある小さな屋根裏部屋にクーラウが住んでいたという。音楽と大変関わりのあったエーレンスレーヤーは、上の方から聴こえてくる美しい調べが気になって、この知られざる音楽家と知り合いになりたいと思い、屋根裏部屋を訪れた。妙なる音色の源は、はにかみがちで、とても謙虚な若者であると知ることになる。かくして友好関係は速やかに結ばれたのである。エーレンスレーヤーは自宅にクーラウを招き入れ、クーラウの演奏に聴き入り演奏にも音楽にも満足して興味を持つようになった。クーラウが『盗賊の城』を作曲するようになった次第、クーラウがこの作品の内容を把握したがる様子を、エーレンスレーヤー自身が述べている。

「ワイセはもう一つジングシュピールを書きたいと言っていたが、クーラウも作曲の希望を申し出てきた。クーラウは器楽作品でかろうじて名が知られているにすぎないが、素晴らしい才能に恵まれている人である。そこで天才二人それぞれに何が似つかわしいか検討してみた。クーラウの方が手際が良く効果的にやるように思えるが、ワイセの音楽には、清らかな夢をたたえ胸騒ぎするようなファンタジーがあり、我を忘れさせるところがあった。そこで、クーラウには『盗賊の城』を、ワイセには『ルドラムの洞窟』Ludlam's Hule を与えた。『盗賊の城』は危難や残虐の情景があるにも拘わらず色彩豊かな生き生きした話である。プロヴァンスを舞台とし、恋人達の輪にプロヴァンスのバラを編み込んだもので、トゥルバドゥール時代の節回しが各役柄に導入されている。盗賊の場面では、お隣スペインのカルデロン風の歯切れ良い韻律を漂わせ、盗賊の非道さに身をすくめるというよりも、彼らの残虐ぶりが単純素朴であきれかえるという具合になっている。」この色彩豊かな生き生きした、トゥルバドゥール時代の調べが、まさにクーラウの音楽の中によみがえったのである。『盗賊の城』をもってはじめてデンマークにロマン派音楽が導入されたのであった。ロマン主義の明るい側面、自然や騎士物語への陶酔がこの地に再び生まれたのであった。この音楽を通じてよみがえったのが、自由の感情、騎士の栄光であった。この音楽はロマン派音楽の先駆けに思える。ワイセの言うとおり、第一幕のアイマール Aimar とカミーロ Camillo の二重唱など、当時のドイツの作曲家とて誰も書き得なかったものである。シェイクスピアの付随音楽では、しかし、ロマン派的な手法はもはや用いていない。カール・マリア・フォン・ウェーバー Carl Maria von Weber には好意的な態度を示していない。ただ、『盗賊の城』のアイマールは『オイリアンテ』のアドラール Adorar と同類で、頭の先から足の先まで騎士そのものである。アドラールの方が内面的でロマン主義にかなった夢想的な特色を備えてはいるが。一方、『盗賊の城』ではプロヴァンスのバラは満開となり耽美の限りを匂わせている。『盗賊の城』のような音楽は田園という環境の中でこそ、作曲するのが望ましいのは当然で、事実、その通りになった。『盗賊の城』の第二幕は、ホルベック Holbäck 近くにあるレーウェン城 Lövenborg の庭園の噴水池にある小島で作曲された。クーラウはレーウェンスキョル Lövenskjold 家の客に招かれ、上機嫌そのものであった。クーラウの弟子の一人が今でも覚えていると言って語るのだが、『盗賊の城』作曲後、何年かたってレーウェン城を訪れたことがあったが、クーラウは快活、陽気そのもので、眠っている同行者の部屋に雄鶏を忍ばせておき、クーラウは真夜中に床を離れて、時ならぬ鶏鳴に立腹する現場の目撃者になってふざけるなんてことをしたという。チャンスを掴んでは楽しむ人であった。1814 年 5 月 26 日、『盗賊の城』の初演は大喝采を博した。貧乏くじをひいたのは詩人エーレンスレーヤーで、およそ 4 ヶ月後、バッゲセン Baggesen は 批評を発表して、この作品は馬鹿げたナンセンスな作品だと酷評した。しかしこれは厳密な批評を下したものとは言えない。むしろ、この作品には、バッゲセン自身のオペラ題材には欠けている気持ちよさと詩的な色彩がある。このオペラがきっかけとなって、後のいろいろな方面での独創的な成果を生むことになった。バッゲセンの批評自体、一面的ではあるものの、機知あふれる傑作である。クーラウは第一級のデンマーク歌劇を創造したのである。女優のスピンドラー Spindler 夫人は、残忍なブリギッテ Brigitte 役で素晴らしい演技を披露したが、バッゲセンもオーワスコウ Overskou も、この様な名演は王立劇場でかつて演じられたことがないと一致して言っている。『盗賊の城』は国外でも、リガ Riga、カッセル Kassel、ライプツィッヒで公演されて、喝采を博した。

『盗賊の城』が世に出た頃のデンマークの音楽は、単純素朴な古風なものであった。信じ難いことであるが、モーツァルトの死後 25 年も経っているのにそんな状況であり、クンツェン Kunzen のような作曲家が、宮廷楽長としてはモーツァルトをデンマークの聴衆に紹介しているのに、作曲家としてはモーツァルト以前の音楽に固執したものばかり作っていたので

ある。『睡眠薬』（訳注：ワイセ作曲）、『若さと狂気』（訳注：エドワルド・デュプイ作曲）にも進取の萌しはなかった。これらの作品の示すとおり、独創性はあるものの、過去の伝統を頑として変えなかった。クーラウによって新しい音楽が取り入れられたという点にこそデンマークにおけるクーラウの大きな意味があるのである。彼は全くの近代作曲家であった。デンマークにおけるモーツァルトやケルビーニ Cherubini の唱道者であった。クーラウはあらゆる作曲家の中でモーツァルトが一番好きであった。クーラウのある作品とモーツァルトの曲の比較の話になったとき、クーラウは激しく言ったことがある。「わたしはその方の履物のひもを解く値打ちもない」。最終的には異常なほどの幸運を得ることになる『盗賊の城』であったが、旧式な愚直さを信奉する輩の間では『盗賊の城』が異議をよぶことになるのは驚くにあたらない。かつての単純なオペラとは対照的に、新しいハーモニー理論と結びついた、オーケストラの独自性、その近代的な取り扱いといった、全く新しい要素が『盗賊の城』で導入されたのだから。

クーラウはこの新奇さの点でケルビーニの影響を大きく受けた。ケルビーニは『二日間』（あるいは『水運び人』）のような軽いジングシュピールでも、対位法の達人であることを隠そうとはしなかったし、その豊かなハーモニーの展開、いわゆる色彩的 / 半音階的手法によって、際だった特徴を示していた。『二日間』はクーラウはすでにハンブルクで耳にしていたらしいが、1811 年再演され、名優クンセン Kundsen が水運び人の役を演じた。最高の名演であったと言われている。この『二日間』の音楽、そしてケルビーニのすべてがクーラウにどんなに強い影響を与えていたかを示すものはいろいろある。クーラウのコンサートで好んで演奏したピアノの作品に、『二日間』の歌に基づく変奏曲がある。また、カミーロのもの悲しいロマンス「喜んで死のう、勇気はないが」はケルビーニの美しい歌に触発されたものらしい。ケルビーニの歌がそのモデルとみなすことも出来る。同じく後のオペラ『エリサ』の序曲も、各所にケルビーニ研究のあとが窺える。

ある時、パエール Paër の『サルジーノ』Sargino のアリアと『ルル』のアリアとの類似性が指摘されたとき、クーラウが言うには、「パエールにはお辞儀して手にキスするが、ケルビーニにはひざまずいて足にする」。『盗賊の城』にはフランス風の響きが感じられる。たとえば最終幕のアイマールのアリアには当時クーラウは耳にした筈がないボワエルデュー Boieldieu の騎士物語『パリのヨハン』Johan von Paris にどこか似たところがある。同じく、「ルイ王は主イェスの墓に」という美しいロマンスは確かに独創的であるが、フランス風の素地が根底にあるのは間違いない。『盗賊の城』は全く新しい音楽の本質とはっきりと近代的な特色を持った新風をデンマークのオペラ界に吹き込んだのである。ただ、誰にも一様に心地よくというわけにはいかなかった。これはバッゲセンによる『盗賊の城』音楽全般についての賛辞にもすでに窺える。バッゲセンは第一幕をまさに「天国の美しさ」と呼び、平凡な台本ではあったが、それがかえって功を奏してか、妙なる陶酔の音の調べが生まれて、始めから終わりまで、一種の唯一無二の劇的ファンタジーの長編を作っている。しっかり書かれた台本に従ったものとは違うのだと言っている。だが、ここにも「しかしながら」が入る。バッゲセンが「オムレツの曲」と呼ぶ曲では、絶え間なく繰り返される「オムレツで邪魔されてファンタジーに浸れない」、「オムレツ一個にこんな雑音はもう結構」と当てこすったりもする。この様な副次的論評はむしろ冗談として言っているようにも思えるが、その一つに、「作曲家のあまりにも大げさな手法、則ち、時折歌をはめ込んだ伴奏には、文句を付ける必要がある」と言っている。この言葉は新奇と未知に対する感情を表したものであって、クンツェンとシャル Schall を頂点とする、時勢遅れの音楽家の判断をいくらか反映したものに他ならない。かくして必然的な成り行きでクーラウはこれらの古強者と交戦状態に入らざるを得なくなった。他の点では、平和で人のいいクーラウであったが、手腕家のクンツェンとやり合い、シャルには冷淡、拒否的な態度をとる次第になったのは注目していい。

クンツェンがまず手合わせの相手となった。クーラウはクンツェンの力量を明らかにせんと立ち向かったのである。クンツェンはクーラウの能力を知っていて『盗賊の城』のずっと以前から尋常ならざる才能を認めていた。クーラウがデンマークに来て間もなく、劇場のピアノ教師に就職を希望した際には、クンツェンは立派な推薦状をしたためて、クーラウほどの才能と知識をもつ人物を必要としないとしても、能力ある人物をこの国に定住させることが望ましいと考える以上、どうしても推薦せざるを得ない、と述べている。そうこうしているうちに、クーラウはピアノ教師の職には就けなかったのではあるが。シャルもクンツェンと同じく直ちにクーラウのうちに潜んでいるものを見抜いたに違いない。しかしながら、一種のねたみからクーラウを撃退することを考えたようだ。クーラウがシャルを嫌ったのは、この所為でもあったであろうが、しかし、シャルを音楽家として軽蔑し山師と考えていたことに嫌悪の根拠があったらしい。クーラウはこう言っている。「彼は８小節の音楽も正しく作れない」*。

* 注：エーレンスレーヤーは、シャルはキルンベルガーの通奏低音理論が理解できなかったという。デンマークの優秀な作曲家ワイセもシャルを軽蔑していたこと、シャルはケルビーニの知己であったことは興味をひく。H. C. アンデルセンがパリで高名なケルビーニを訪れた際、クーラウの名も、ワイセの名もケルビーニは知らなかったが、シャルの消息を知りたがった。かつて、一緒に住んでいたことがあったからである。

クーラウとクンツェンの友好関係は『盗賊の城』で突如終わってしまった。クンツェンはケルビーニ風のやり方を批判する一方、クーラウも報復としてクンツェンを批判する順番となり、まるでクーラウのカノン作家としての才能を試しているようであった。

カノンは今や廃れているが、かつては大変人気のあった音楽形式で、対位法の名人にとっては暇つぶしの気晴らしとなったものであった。名だたる音楽家達が、気ままな思いつきをカノンにして楽しんだのである。とくにモーツァルトは一連の陽気なカノンを作った。歌詞もきまって自分で書いている。カノンは一種の曲芸作品で、数学的に計算して作曲されるかに見える。形式上の不可避的な厳密さがあって、メロディは全声部で繰り返されねばならないと言う制約はあるのだが、コミカルに作られると、何とも抗しがたい効果が生まれる。あからさまな事実や、きつい冗談を、嘲笑的に、手短に印象付けたい時にはカノンはまさにそれに適った手段である。カノン作曲は、クーラウにとっては生涯、真面目なカノンも、愉快なカノンも、謎のカノンを組み立てるのも、まことに楽しみであった。謎のカノンの最終的な原則は個々の声部の最初の入りを指定しないでおくことである。クーラウは一般音楽新聞（A.M.Z.）に永年、カノンやなぞなぞ音楽を掲載してきた。モシェレス Moscheles がコペンハーゲンにやってきて、クーラウの知己を得たことを喜び、クーラウのことを並はずれて練達した謎のカノン作家とよんでいる。「クーラウは音楽の鍵をいくつもいくつも作り出すのです。するとますます、鍵を開けるのが難しくなる。そして謎のカノンを見つけるまで、心安らかならずという具合です。こうやって、クーラウとワイセ は互いにカノンを書き送っているのです」と記している。クーラウがベートーヴェンを訪ねたときには、「やあ、カノン名人ようこそ」が、ベートーヴェンの最初の挨拶とされている。クンツェンに関して言えば、ベートーヴェンのこの気の利いた言葉もなかなか悪くないしゃれである。クーラウは老クンツェンに、あるやり方で攻撃を開始したのである。このやり方はクンツェンは決して忘れなかったし、赦さなかった。これは二つのカノンによる攻撃で、その作詞者もクーラウであったに違いない。詩作を楽しみとするクーラウを我々は知っている。同時に、もっぱら音楽的な効果をねらって作ったことも明白である。最初のカノンはクンツェンの有名な大鼻をからかったもので、ただ単純にこう歌っている。

「おお、汝、鼻の中の鼻よ、
我が鼻はくらぶるに足らず」

もう一つは、表題が「反ケルビーニ主義」となっていて、

「ああ、ケルビーニの音楽よ、
その色彩のあざやかなさま！
クンツちゃん作の調べの良さは
真水のような透明さ！」

二つ目のカノンは最後の個所でクンツェンのメロディが用いられ口笛で吹くようになっている。これらのカノンは見事な手法で音楽が出来ていて、味方の連中は、あちこちで、鼻の歌、真水の歌のカノンを合唱して、大笑いし喝采したのであった。

加えて、クンツェンの憤激の種となったのはバッゲセンが『魔法の竪琴』の作曲をクーラウに依頼したことであった。このジングシュピールはクンツェンには特別の因縁があったものだからである。1789 年以来、バッゲセンは『魔法の竪琴』の計画を練っていた。恋人のために自分の持ち物の中で最高に大切なもの、不思議なリラを捧げるという着想で、バッゲセンは大忙し、実に大がかりな計画を立てた。テーベの城壁を建て、かたわらで琴を奏でたいというのである。あちこちに旅行する間、この計画をやるかやらぬか、たびたび変更していたが、最初の計画では、第一幕の作曲はクンツェンに話があり、名前は『魔法のリラ』にするか、『テルパンダー』にするか、それとも『アリオンのリラ』にするか、決まっていないが、ともかく完成すると約束して依頼したのである *。

* 注：バッゲセンによる「魔法の竪琴の事件―イエンス・バッゲセン : ペーザ・ヨート訴訟」1818 年　参照

1799 年帰国したバッゲセンに、クンツェンはオペラの作曲は大体終えたこと、酒が入ると節回し良く作詞が上手になるドイツ軍曹に手伝って貰って、少し書き加えたことを伝えた。デンマーク語で書いた台本がドイツ語訳になっているのは、

歌手であるクンツェン夫人が歌えるようにと軍曹が世話を焼いたと、バッゲセンは直ぐ事情を察した。彼女は、そのころはデンマーク語が出来なかったからである。軍曹の歌詞を読んで、バッゲセンは死ぬほど笑い、メロディが付けられるように台本を完成させるだけと思った。そこで、劇場とのいろいろな事前措置を講じ、クンツェンには稿料の前払いを支払った。ところが、作品となると、バッゲセンはいっこうに完成させようしないものだから、クンツェンとはしばらくの間、喧嘩状態になってしまった。永い年月がたって、バッゲセンは再びやる気になったものの、クンツェンの方はもはや係わりになる気はなくなっており、作曲はワイセを推薦した。その指示に従ったのか（作曲の交渉があったのか）、どうなのかは不明だが結局のところクーラウがそれを手にすることとなり、バッゲセンが 30 年もの間、手がけたオペラは、1817 年 1 月 30 日、国王誕生日に上演されることになった。上演数日前に、アドレッセ紙に予告がでたが、この公告の下に、ペーザ・ヨート Peder Hjort という神学生の書いた申し出でが掲載されているのである。バッゲセンはその署名を読んだが、タイトルは、「J.J. バッゲセンによるオリジナル作品『魔法の竪琴』と本作品の原作との顕著なる類似点について」というもの。よりにもよって、バッゲセンは病気で寝ていたが、次の日、クンツェンの家に向かった。クンツェンもまた、病気だったが、ここではじめて、酔っぱらいの軍曹は架空の人物であること、忌々しい詩句はクライバー Kleiber という友人が作者であること、ペーザ・ヨートが証拠として持ち出したいわゆる原作は、バッゲセンの構想に基づいてクライバー が練り上げ、『オシアンの竪琴』と名付けられたものであること、その後、ある日、クンツェンが策略を用いてそれを巻き上げ、ペーザ・ヨート に渡った次第ということ、を聞き知ることになった。バッゲセンが軍曹作と思って読んだ箇所は、したがってクライバーが完成した台本の一部だったのである。結局、次のような激烈な論争に発展した。論争の中でバッゲセンはさらに事実を知ることになる。

バッゲセン
　クンツェンさん、クンツェンさん、あなたの仕打ちはどうかと思います。私の台本の作曲には、私の取り分を放棄して、あなたには前渡しで支払いを済ませているのですよ

クンツェン
　私の作曲したものがあります。たしかに、この作品はありました。すでにウィーン、ハンブルクで演奏されたものです。勿論、口笛の嵐にやられましたが。

バッゲセン
　何だって？　演奏されたって？　私の作品として？

クンツェン
　とんでもない。台本の印刷もないし、作者も分からないままで。

バッゲセン
　それでは クンツェンさん、『アリオンの竪琴』を改編されたのですね？

事情が明らかになって、尊敬すべきクンツェンがすっかり評判を落としてしまったが、クーラウに『魔法の竪琴』を渡してしまうこのバッゲセンのやり方は正当ではなかったと、クンツェンは自分の権利を主張した。「私にとって、どうでも良いことではありません。永らく私に委せる筈だったこの作品をクーラウに渡してしまうとは！」と怒りにふるえる声で言った。バッゲセンは言う。クンツェンが使ったようなひどい言葉で言い返すつもりはない。そして付け加える。クンツェン氏は癇癪をおこして引きつけたらしい。この場面は、バッゲセンの厳粛な宣言で終わりを迎えた。「クンツェン氏を心底から赦しましょう。貴殿の栄誉を守り、こう言いたい。かの作品上演に関しては貴殿にすべて許可しましょう。バッゲセンは貴殿の最高の友であることがおわかりになるでしょう。」しかしながら哀れにもクンツェン はこれを知る由もなかった。その晩のうちに彼は死んでしまったのである。この晩の祝祭演奏会は当然のことながら平穏のうちに行われた。次の二日目は一般入場券が 5 倍の値上がりになった公演というが、バッゲセンには大嵐の演奏会になった。バッゲセンは告示を出して、ヨートの誣告が真実ではないことを証拠文書で公開すると述べていたのであるが、バッゲセンの敵は永年のエーレンスレーヤーとの抗争を知っていてバッゲセンに反感を懐いていたので、この機会を逃すまいと待ちかまえていたのである。連中が平土間で無料で配ったヨートのパンフレットには、『魔法の竪琴』第一幕すべてが、『オシアンの竪琴』と並記して書かれていたの

である。場面が喝采を浴びるたびに、「賞賛はクーラウに」と叫ぶ。幕が下りると、拍手喝采が巻きおこり、「クーラウ万歳」の声がまたあがって、口笛が鳴り響き、ブラーボの声、拍手の波が起こった。「バッゲセン万歳」と一方が叫ぶと、「真の作者万歳」とやり返す。半時間もの騒動が続いて、軍司令官が平土間に入って、国王の名により静粛を命ずる有様であった。そこでバッゲセンは、自分が正当な作者であることが明白に判定されるまで中断したいと申し出たので、上演は中止となった。1818 年になり、ヨート相手の訴訟の判決が下り、バッゲセンの勝訴に終わって、次の年、再演されることになった。「これからは安心だね、真の作者万歳 の声があがっても、私自身が正しい作者であることは証明済みだから」とバッゲセンは言っていたが、予言の通りの歓声があがることはなかった。これは激烈なスペクタクルの新演出で上演されたもので、あとは二度と上演されなかった。世間一般の評価では、見事な作品ではあるが、長すぎて、退屈だと思われたようである。詩人ユリアーネ・マリー・イエッセン Juliane Marie Jessen は好意的に見ていた人であるが、病に伏せるバッゲセン宛に演奏会についての忌憚のない感想を寄せて、「全般的に、うきうきするところがありません。クーラウは今回の歌は成功していませんね。『盗賊の城』で盗賊を静めたような歌ではありません。成功をよぶ好運は滅多に訪れものではないようです。さる貴人が嘆いておっしゃるには、台本家も作曲家も振り付け師も上手く調和がとれておらず、それぞれ自己主張であくせくしているのだからと。圧巻は最終シーンのオルフェオの役を演じた「老ローセンキレ」Rosenkilde でしょうとおっしゃいます。喜劇役者とばかり思っていた彼が、テルパンダーを演じて厳めしくも七弦のリラを奏でるオルフェオの役で雲の上を舞うとは想像も出来なかったそうです。」と書き送っている。このオペラは、劇場文書庫に保管されている。序曲だけが出版された *。確かに詩的なアイデアのある作品ではあるが、通読しても魅力があるとの印象は得られない。自然さと暖かみに難のある作品である。

* 注：『魔法の竪琴』の中には、いくつか、今日でも耳にする美しいナンバーがある。『ヴェニスの商人』第五幕の、ロレンツォとジェシカが月の光を浴びる庭を散策する場面で演奏されるチェロの曲は、テルパンダーの「目覚めよ、この世ならぬ美しき乙女よ」による。「きれいな音楽を聴くと元気がなくなるの」というジェシカの気分は、クーラウの夢見るようなメランコリックな響きを聴くとよく分かる。同じく『ヴェニスの商人』でバッサニオが三つの箱を前にして思案する場面では、『エリサ』のコーラス、「奮い立て、おお、やさしき愛よ」が奏される。王立劇場にある『魔法の竪琴』のクーラウの手書きスコアは、1865 年、ブル (旧姓ゲルソン) 夫人から寄贈された。その他のオペラスコアの手稿はすべて失われたようである。

この様にして、クーラウは当時首都を吹きまくる芸術運動の渦中に身を置いていた。相対する派の両方に知己をもつクーラウは、陣営をあちこち移って両者と苦楽をともにしたけれども、ワイセはそうでなかった可能性があるが、この抗争のいずれの派に組みすることなく、そのような音楽家の枠を越えて、はるかに個性的な真の音楽家であった。ワイセ はバッゲセンの気の利いた洒落に魅了されていたが、その忠告にしたがってエーレンスレーヤーから依頼された『ルドラムの洞窟』の作曲はいつも永らく辞退していた。エーレンスレーヤーは最後まで、クーラウ、ワイセにたいして二人を暖かく見守るファンであった。エーレンスレーヤーの仕事でデビューしたクーラウは、彼の仕事『ダマスカスの三つ子の兄弟』で舞台音楽の道を去ることになる。 この作品に関するクーラウがエーレンスレーヤーに宛てた、1830 年 4 月 23 日付けの手紙では、クーラウは敬称を用い、貴殿云々と書いているが、エーレンスレーヤーの返事はしゃちこばったものではなかったらしい。半年後の手紙では、クーラウはエーレンスレーヤーを我が友と呼んでいるのだから。

第３章

クーラウ像

クーラウやワイセが活躍した時代の音楽界は、現在よりもずっと活発であった。全てが新しいことばかりだったのである。現在の音楽界には、ワグナー、リストによる未来音楽派と、古くからのドイツ巨匠流の二大流派が対決しているだけだが、当時は事情は別であった。フランス、イタリアでは、第一級のタレントがひしめき合っていた。フランスのジングシュピールでは、ケルビーニ、ボアエルデュー、イタリアのオペラではパエールとか、ロッシーニといった連中が頑張っていて、劇場音楽作曲家はいずれの流儀が正当派なのかとおぼつかなげに自問するような状態であった。ドイツでは、モーツァルトが到達不可能な巨匠であったし、ベートーヴェンもモーツァルトに呼応するかのように、最晩年には全く新規の考えたこともないような手法を用いた作品を作ったものだから、音楽家たちは何と決断したらいいのかわからないと言う状況にあった。手に負えなくなったベートーヴェンについて、ワイセは「縛り付けて置かなきゃ」と言ったという。同じくカール・マリア・フォン・ウェーバーの登場とともに音楽におけるロマン主義が、一挙に開花し、彼の『魔弾の射手』は一世を風靡したのであった。イタリア風、フランス風、モーツァルト流、ウェーバー流など、皆それぞれに多彩な、紛れもない独創性を備えた方向性が作曲家たちに開示されたのである。イタリア、フランス、ドイツに住んでいる作曲家にとっては、選択は容易で、自分の国の主流に従えば済む。しかし、デンマークでは、国内で通用していたのは、モーツァルト以前の古風な様式のオペラがあるだけで、聴衆の満足を得るようなものではなかった。（新しい潮流の中にあって）、どの方向性に従った手法を選ぶべきであったろうか。どれも重要で、どれも同じように影響力のある手法の中から、何を選べば良かったのだろうか。こういう厄介な状況に、クーラウもワイセもいたわけであったが、二人の解決策は全く異なったものであった。ワイセは「君子危うきに近寄らず」の格言に従って、じっと膝に手を置いて、出来るだけ影響を受けまいとし、左右に気を取られることがないようにしてオペラを書いた。一方、クーラウは安閑とせず、イタリア音楽は理論の点から非難し、嫌い、また、ウェーバーを鋭く批判したものの、クーラウ独特の身の振り方で、どの趣向の音楽にも乗ってみる（取り入れる）というやり方を取った。この故に、クーラウは独創性のなさをしばしば非難されることになる。実際のところ、たいていの音楽家は、特定の様式のみを採用するのが常であるのに、世間で評判になったもの、傑出したものには何でも、感銘を受け、尊敬に値する神々には全て敬意を払ったのがクーラウということであろう。特定の傾向の音楽とか、あるいは、卓越した大家の精神に影響されたからといって、クーラウの音楽が、独創性に欠けるということにはなるまい。従来から、偉大な音楽家は偉大な模倣家でもあったのだ。肝腎なことは、ある課題を自家篭中のものにする芸術的能力の有無にかかっているのであって、ホルベア Horberg がモリエール Moliére を利用したのと同様なことが、まさにクーラウにも当てはまるといえよう。クーラウの手になる模倣作品そのものが、多くの場合、独創的な作品だったのである。別の見方をすれば、音楽の源泉の国のどれかにクーラウが居住していたならば、クーラウは全く別のさらに優れた作曲家になりえたという可能性もあながち否定できない。確かに何でもこなし屋であっては勝者となるのは難しいのだから。しかし、音楽的には貧しく、大河から外れた国に住まざるを得なかったというのは、クーラウの運命であった。そういう事情からであろう、ドイツへ、ベートーヴェンの許へ、音楽の源泉の国へと旅をしたのは、その必然性があったのだ。

クーラウの作品は同時代の動静を写して比類なき複製品といえるほどのものとなったのであった。したがって、クーラウの作品がしばしば、予期せぬ驚嘆を呼び、感嘆を惹き起こしたのは驚くにあたらない。紛れもなく明白にフランスの影響を受けたオペラ＊で初舞台を飾って人を驚かし、ワイセと同様、デンマーク人で通していると誰もが思っていたクーラウがその代表作『ルル』では、敵陣営に走って、イタリアの旗を振るに及んで、また人を驚かしたのである。

（訳注：『盗賊の城』）

ロッシーニは当時ヨーロッパ中で、無類の凱旋行進を続けていた。まだ『ウィリアム・テル』の作曲以前で、『セヴィーリャの理髪師』を世に問うた頃であった。しかし、このオペラは毎年のように量産する様々なオペラと同じく大海に注ぐ一滴に過ぎず、どれもこれも瓜二つで、際だった特色のないものばかりであった。どのオペラでも、単調な、しかし、魅惑的なメロディが流れ、それを中断するのは、意味のない耳を聾する騒音といったもの。だが、何千人もの崇拝者が、この作曲家の前にひれ伏す有様で、イタリアオペラはまるで、音楽の一大強国のごとき様相であった。デンマークには、1819 年以降、ロッシーニとイタリアオペラをシボーニが紹介し上演したが、デンマークではロッシーニを支持する声は少なかった。たしかに、宮廷や貴族はシボーニを支持したが、大衆はクーラウや、ワイセに代表される古典的音楽あるいはデンマークの音楽の味方をしたのである。このようにデンマークでは、他の都市、たとえばウィーンよりもイタリア音楽の反対派が多数派だった。ウィーンでは、ウェーバーの『オイリアンテ』はイタリアの歌姫に対抗し得ず、「アンニュイヤント（退屈さん）」と揶揄される有様であった。クーラウもワイセもイタリア音楽を非難する点では一致していたが、感受性の強い精神の持ち主である

クーラウのことだから、流麗なメロディには心が動かされ、イタリア音楽の美しさに目をつぶっていたのではない。クーラウの友人であり、著名な音楽愛好家として知られた卸商ゲーオ・ゲアソン Georg Gerson 宅で音楽会が催された時のことを、N.C.L. アブラハムス Abrahams が述べている。ゲアソンが、黄色に変色した五線紙に書かれた、インクの色も褪せた楽譜の切れ端をクーラウに見せ、モーツァルトの遺品にあったものを送ってもらったものだがと言ったところ、クーラウは、このようなパッセージを書ける音楽家はモーツァルトの他にはいないと断言した。ゲアソンは吹き出し、これは自分が仕掛けたトリックだ、『セヴィーリャの理髪師』で、バジリオのアリア伴奏の一節だと打ち明けた。ゲアゾンはとりわけ人を騙すのに打ってつけの、モーツァルト風の楽節を選んで、人を引っかけようと企んだのであった。クーラウはロッシーニの評価をなかなか変えなかったが、『ウィリアム・テル』が世に出ると、イタリア音楽は大流行となり、好むと好まざるとに拘わらず、耳にしないわけにはいかなかった。クーラウが敵対することになったのは、先ずもってロッシーニだけであった。パエールのようなイタリア音楽家をクーラウが高く評価していたことは知られている。シボーニ Siboni が上演したパエールの『サルジーノ』が最初のイタリアオペラで、当初から、イタリア音楽に対する嫌悪感があったものの、これは成功を収めた。クーラウも 1821 年の外国旅行の際、すでにスポンティーニ Spontini のオペラに接していたようであり、イタリアオペラの特色である壮麗な様式に魅せられていた。総じて、イタリアオペラはあらゆる要素において、この世のオペラ傑作作品の基礎となる役割を担っていたのである。ロッシーニ風、スポンティーニ風の音楽はまさしく古典となって、アルプスを越えて、北へと移住していった。この間も絶えず、イタリアオペラの精神は輝き、音楽の血肉となって引き継がれている。北に向かって行った音楽には、イタリアオペラの心髄があればこそであった。アルプスの北の劇音楽作曲家たちには南国イタリアへのあこがれがあって、グルック、モーツァルトを育てたのはイタリアなのである。デンマークオペラの最高傑作も明らかにイタリア要素を取り入れて比類のないものとなっているということは注目すべきである。このオペラが即ち『ルル』である。

クーラウはルル＝テキスト検討の仕事を引き受けた。これは、モーツァルトは断念したようだ。『ルル』は『魔笛』の原典であって、モーツァルトは『ルル』の一部の作曲をすでに手がけていた。『魔笛』の最初の部分がそれで、ちょうどこの題材がウィーンのある劇場で大評判になっていた頃のことである。しかし、当たっている『ルル』で競うのは危険に思えたので、シカネーダーは、別のものに見えるように、あるいは別作品となるようにこれを書き換え、それでモーツァルトは成功することになった。かくして、筋書きの原典プランが東方で進水し、西方に上陸して、『魔笛』が世に出たのだ。ヴィーラント Wieland の童話集「ジンニスタン」Dschinnistan の『ルル』物語を借用した『ルル』の題材が大いに気に入って、詩人ギュンテルベア Güntelberg は台本作りに取り組んでいた。オペラ脚本を書き上げ、劇場での採用が決まると、作曲は最初、ワイセに依頼された。このときの台本では、鋼鉄製の点火器を使う場面があったためか、ワイセは気に入らず、「鋼鉄と火打ち石の音楽など作曲したことは一度もないし、今だってその気はないね」と言ったという。その代わりに、この冒険ファンタジーに喜んで取り組む気のあるクーラウという作曲家をギュンテルベアは得たのである。この物語の仕事は、『魔笛』を聴いていたクーラウにとっても、それなりの価値があったに違いない。本式の仕事が始まると、直ぐ、ギュンテルベアは台本作家の葛藤を味わわざるを得ないことが判明する。最初は、クーラウとギュンテルベアとの両者間の一致など不可能に思えた。劇作家スクリーブ Scribe とマイヤーベア Meyerbeer との間に起きた葛藤と同じことをギュンテルベアも蒙ったに違いない。クーラウは、台本の細部にわたって、自分の理念に合わない箇所は変更を要求したからである。しかし、二人とも次第に対立する考えにも互いに同意するようになり、協同作業は一年半ほどかかったが進捗して、素晴らしい決着を見ることになった。クーラウは台本の登場人物にすっかり通暁し、なかでも気に入ったのは女主人公のシディであった。シディは光の妖精ペリフェリーメの娘。地霊の王ディルフェングの権力下にあって、純な乙女心の力を以て、様々な陥穽にあらがっている。コラサン国王子ルルは魔法の指輪と笛のおかげで地霊の王を成敗しシディを救うというのが、筋書きである。内容変更がなされた台本が劇場に届けられると、ラーベック Rahbeck は憮然として、「変われば変わったでまた文句がでるのに」と言ったという。クーラウは夢中になって作曲し、歌が出来ると友人の歌手に頼んで歌って貰った。なかでも、ナタンソン Nathanson 家において N. C. L. アブラハムスやテノールのイェンス・ルン Jens Lund が歌ったこともある。舞台稽古ではクーラウ自ら指揮をとるという熱心さであった。ある晩遅く、例の風変わりな魔女の歌、「蠅の王様が狙っている」（第２幕、第８曲）を作曲しているときのこと。出来上がると、ピアノに向かって何度も通して弾いた。これで良いとなると、出来るだけ小さな音で即興変奏をやっていたが、突然、身の毛もよだつ思いで中断することになった。クーラウは大蜘蛛が大嫌いだったくせに、人には、蜘蛛は音楽がわかる虫で、夜遅くピアノを弾いていると連中がやってきて壁につくばい、機嫌がよくなると脚を揺り動かすのだ、などと吹聴していた。この夜の蜘蛛は、しかし、別の行動で、音楽に近づかんとしたのである。つまり、クーラウの顔の上に降りてきたのだが、鍵盤の上に脚を拡げるまで、クーラウは気がつかなかった。クーラウはびっくりして、

飛び上がり、隣室で寝ていた家人を呼び起こして、蜘蛛を庭に追い払って貰うという騒ぎになり、この夜の作曲も演奏もおしまいとなった次第。翌朝、友人のヘー＝グルベア Hoegh=Guldberg のところに飛んでいき、顛末を話したそうだ。蜘蛛は幸運をもたらすという俗信があるが、この幸運は危険にさらされそうであった。というのは、『ルル』はロッシーニの亜流だから、野次り倒されるぞという噂が広がり始めていたのである。1824 年 10 月 30 日の初演は、王妃誕生日に因んで催されたこともあって、平穏無事であった。大事が起こるとなると翌晩だが、クーラウが劇場に赴くと、ダフ屋が、「野次が飛ぶよ、チケットいかが」とかざしてみせるのだ。ところが、観衆はオペラの美しさに圧倒され、口笛を吹いたのは数人の若者だけであった。第一回公演の晩、クーラウは楽譜商オルセン Olsen とヘー = グルベアの息子を招待して一階正面席に座っていた。大四重唱（第２幕、第９曲）が終わると、ブラーボの声止まず、作曲者万歳の割れんばかりの大歓声があがった。頭を抱えて、身を小さくしているクーラウをみて、同行の友人の息子は、「クーラウは此処にいるよ」と叫んだ。此処で、また、大拍手、大喝采が起こったが、クーラウはますます身体をこごめて、「この裏切り者め」とつぶやくばかり。数年後、『ルル』について、クーラウは、「このオペラは実に大当たりで、劇場の最高の稼ぎ頭の演目です」と手紙を書いている。主役の一つシディの役は、ズルザ Zrza で、彼女もクーラウと同じくシディの役には並々ならぬ興味をもっていた。第３幕の難曲のアリアを歌い終えると大歓声があがって終わらない有様だった。小人バルカ役のツェッティ Cetti は、風変わりでおどけた、しかも詩情にあふれた演技で抜群の成果をあげた。イーダ・ヴルフ Ida Wulff はベラの役でデビューし、可愛いいヨハネ・ルイーセ・ペチェス Johanne Louise Pätges は子役を演じた。シディ役のズルザが引退すると *、このオペラは劇場の演目に載らなくなってしまった。

* 訳注：1838 年

フランスで、少なくとも２回上演計画があったが、わかっている限りでは上演されてはいない。一つは、1829 年のオデオン座での上演計画で、総譜が発注され、クーラウもこれを契機にパリ旅行を準備したほどであった。また、1865 年、『魔笛』が大当たりになったときに合わせて、テアトル・リリクで『ルル』案が検討されたが、1829 年と同じく取りやめになったようである。我が国デンマークでは、鐘楼守リンク Link に感謝すべきかも知れない。リンクが『ルル』を心に描いたのは間違いないし、ソフィー Sophie の最後の「いやよ」Nein! は、「ワインがなければ、この世は終わり」（第３幕、第１７曲）のメロディーを使ったのだから *。

* 注：大人気を博した、ハイベア作の風俗喜劇『いやよ』の中で、鐘楼守リンクが『ルル』のメロディーを歌い、いや、いやと拒否するソフィーに求婚するシーンのこと。

この歌のバッカス風の放埒さは、お人好しの鐘楼守では、うまく行かなかったのは仕方がないが。

『ルル』を作曲したクーラウが炎と激動、光と影を備えた劇作品の天才であることは明白である。イタリア風の活気、壮大さが輝いているが、核芯はモーツァルトを志向し、モーツァルトの方向性を目指している。クーラウは多数の先達に師事を求めた末、偉大な傑作を作り上げたのである。『盗賊の城』（最初の劇作品）は最高に詩的な作品であり、『ルル』は最高に非凡な作品である。この２作品の間に、『魔法の竪琴』の他、ボイエ Boye によるジングシュピール『エリーサ = 友情と愛』（1820 年初演）を作ったが後者の脚本が舞台向きでなかったこと、また作曲の報酬も十分ではなかったと言う事情もあって、劇場のレパートリーとしては続かなかった。音楽は高く評価されていて、各所に際だった美しさをみせている。バス・アリア「いとけき花」は今でも愛唱歌であり、序曲は現在も流布している。

『ルル』とワイセの『フロリベラ』Floribella は同じシーズンに、最初の上演が行われた。『フロリベラ』は期待はずれで冷遇された。刮目を集めたこの二つの作品の出来映えがあまりにも違うことから、作曲家二人は、はっきりと区別されるようになり、党派が二つ生まれることになってしまった。以前は、二人とも反イタリア派と見なされていたのに、クーラウと反イタリア派のワイセ、イタリア色豊かな『ルル』が古典的な『フロリベラ』を打ち負かしたということになって、クーラウ対ワイセの対立になってしまった。二人とも、党派組みのきっかけを作った訳ではない。クーラウは、少しも意図していなかったが、ワイセの方は、時々、クーラウのパロディ曲を作って、からかったりしたものだから、心ならずも、党派組みに加担したことになろうか。総じていえば、二人とも互いに認め合い、いつも友好的に過ごしていた。クーラウがワイセを高く評価していたことは、手紙に残っている。ブライトコップフ社にあてた 1812 年の手紙には、かくも早くピアノ協奏曲が刷り上がって嬉しい、これをワイセに献呈し、ワイセへの敬意と友情のあかしとなることを祈るとある。これより数ヶ月前の手紙ではワイセを高く買っていることが特に明白で、（この年に出来たワイセの）『ファルーク』を評して、「筋書きは退屈なものだった。しかし音楽はみんな気に入った。しかし、本当の価値に応じて、とまではいかなかった。というのも、当地の

聴衆にはこの音楽はあまりにも高貴、あまりにも独創的なので、はっきりと理解できないのだ。耳の肥えた聴衆ならいつでも楽しめるオペラだ」と書いている。ワイセといえば、方針を定めたクーラウがワイセを打ち負かして、評価が上がってしまったのだから、面白くなかったに違いない。クーラウのオーケストレーションが勝っていることがワイセにとっては棘となったようである。「オーケストレーションは私には判らない。クーラウなら出来るよ」と気むずかしく言ったという *。

* 注。クーラウの評価があがったという現実が、ワイセには耐え難かった様子を伝える逸話がある。モシェレスがコペンハーゲンを来訪した際、楽譜商ローセが夜会を催した。作曲家クーラウもワイセも町の著名な音楽愛好家たちと同席した。モシェレスの演奏のあと、ワイセが即興演奏をしたところで、オーエペータセン Waagepetersen がモシェレスにクーラウにも演奏するよう命じてくださいと頼んだ。クーラウは隅に隠れてこっそり聴く側にまわっていたのであった。モシェレスが与えたテーマの即興変奏を見事に弾いたクーラウをモシェレスは掻き抱いて「君は No.1 だ。神業のような演奏だ」と褒め称えた。これを聞いてワイセは気分が悪くなり、帽子を取って帰ってしまったというのである。ただ、この話は事実と異なる可能性にも注意すべきである。モシェレスの妻が編纂しモシェレスの手紙に基づいた本の中では、ワイセとクーラウとに怨恨など全くなく、互いに理解し合っていたことは間違いないとモシェレスが述べているし、上記からもわかるように、コペンハーゲンではワイセが最も興味をひく人物であると印象深げに言っている。又、モシェレスの言葉の端から、もし選ぶならワイセだ、といっているように思える。クーラウの即興演奏にワイセが負けたという話は誰も聞いたことがないという。

ワイセは、イタリア音楽を想起させるものは何でも如何に忌み嫌っていたかを考えれば、彼が『ルル』を格別楽しんだ筈はあるまいとほぼ確実に信じても良かろう。現在のベアグレーン Berggreen 教授がワイセの弟子であった頃、若さにまかせて『ルル』を否定する批評を書き始めたが、ワイセはこれを見つけると、「こんな風に書いてはいけない」と書き込んで、全文にばつ印をつけたそうだ。これまで見てきたように作曲家二人の間には確固たる違いがあるので、あらゆること全てには同意は出来なかったのは当然であろう。シュヴェンケがいう、「クーラウには音楽の天分が備わっている。理解の上のみならず、情念の上でも同じく」。この基本的音楽性、形式の完璧性、驚嘆に値する機敏さこそがクーラウの独創性である。はるかに難解な対位法性格をもつ作品にあっても、常にこの立脚点にたって作曲しているのである。

これに対して、ワイセの才能はそれほど徹底的に音楽的であったとは思えない。「音楽的には上手くやれないとしても教授くらいにはなれるさ」とクーラウが言ったというのもむべなるかなである。

クーラウはワイセだけでなくデンマークの他の作曲家と比べても若手派である。彼が作曲するのは、青年の夢であり、天性の泉であり、万物における生き生きとした活力である。それ故、大学生たちとの交流も生まれることになった。学生たちは、楽しめる四重唱の作曲を切望し、クーラウとの交遊関係が出来た。クーラウは学生クラブに四重唱を献呈し、ワイセとともにクラブの特別会員になった。学生の中にいつもクーラウの信奉者がいたのである *。

* 注：クーラウとワイセが学生クラブの会員になったいきさつは学生クラブ総会記事抜粋にある。

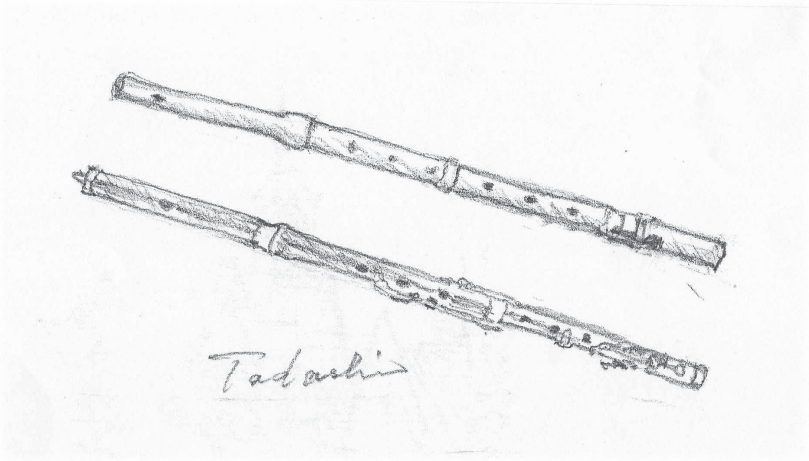
1828 年 3 月 7 日。クーラウ氏およびワイセ氏の投票に関して、前者はクラブに四声の歌集を献呈され、氏を記念して開催された夕べの集会につづく祝宴において、クラブ入会を希望された。ワイセ教授に関しては、長老には同様の希望が伝えられており、照会の上、本人の希望が確認された。投票に付置し、承認時期を通知する。この結果は、クーラウは 68 対 10、ワイセは 65 対 7 で、両人とも、特別会員として承認された。

1873 年に学生クラブが男声合唱の学生歌集を出版したが、クーラウの四重唱が重きをなしているのがわかる。クーラウはベルマン Belman に次いで、歌集を代表する作曲家であって、クーラウの曲は 15 曲ほど収められており、その多くは珠玉の作品である。クーラウの非凡さを簡単にワイセと比較したいなら、「旅の歌」「春の調べはヒバリの胸から聞こえた」とワイセの「われらの住まいはさびしく、暗く、狭い」とを比べてみると良い。歌詞はホストルップ Hostrup 原詩とは若干異なるものの、ともに歌の理念にぴったり合うものである。旅の歌は学生生活の喜び楽しみをあらわし、ワイセの歌は理想的な深い内面を表出している。「旅の歌」と並んで、若者の感性に溢れるクリスティアン・ヴィンター Christiana Winther の「人生の流れはあなたを疲れさせる」がある。しかし、クーラウの全四重唱の中で最も壮麗なのは『小悪魔』である。“ 優美の女神 ” 詩人バッゲセンが作曲家を続けていたら、彼も同じような曲を作ったであろう。バッゲセン流の作風で作られ、バッゲセンの優美さ、微妙ないたずらっぽさが際だった曲なのだ。この四重唱は学生歌の傑作でもある *。

* 注：学生歌集にあるクーラウの四重唱は他と同様、ドイツ語歌詞に作曲されたものである。デンマーク語への訳出方法は種々あり、原詩は多少自由に、あるいは、詩格を変更して訳されている。例：B.C. プロウ Plougの「森では人生はアンダンテに進む」，クリスチャン・ヴィンターの「人生の流れはあなたを疲れさせる」。後者はクーラウのメロディに合わせて、目の前で書かれたらしい。この歌は、風俗画集「色とりどりの落ち葉」に収録されている。宴会で歌うときは、古来の演奏習慣にならって、四声で合唱することになっている。ホストルップの「旅の歌」はクーラウのメロディを用いて、1856 年ストックホルムで開催されたスカンジナビア学生大会用に作られた。外国で最も有名なクーラウの四重唱は、ゲーテの「峰には憩いあり」につけたもので、ドイツの合唱歌集のいずれにも載っている。ただし「梢の下に憩いあり」となっている。

「ロマンス作曲家」とワイセは言われるが、クーラウは四重唱作曲家としての評価がある。クーラウにも少数のロマンスや独唱曲があり、晩年になって、未刊の曲も含めてこれらが刊行されることになった。この中には、『モルジアーネの墓に寄せるアラディンの子守歌』が入っている。これはクーラウの最も初期の歌曲であって、憂愁の響きを湛えた歌である。しかし、総じて、クーラウの歌曲には、ワイセのような抒情性あるいは顕著な個性はない。クーラウのロマンスや歌曲は他の作品と違って時に古風であるのに、ワイセはこの分野では現代的である。カンタータの作曲はクーラウは稀に試みただけである。1817 年の宗教改革記念日に際してのカンタータ、1828 年の結婚記念日に際してのラーベックのカンタータがそれで、他にはヘルシンオア Helsingør 音楽協会の委嘱で書いたフレゼリク 6 世祝祭に際しての小カンタータの自筆譜が残っている。

第４章



クーラウの守護神？

クーラウがコペンハーゲンにやってきたときは、長居するつもりはなかった。自分では一時的の滞在のつもりだったので、「差し当たり」と手紙にも記している。しかし、年を経るにつれデンマークとの結びつきは強くなり、1813 年 2 月 20 日には宮廷楽師の一人となった。欠員が生じ報酬枠が確保される迄は無給との条件付きではあったが、このおかげで、帰化の許可が下り、1813 年 3 月 3 日、デンマーク居住権を得たのである。宮廷楽師の任命はミュンスター Münster 伯夫人の厚誼によるもので、クーラウはこれに応えてピアノソナタ (* 訳注：op.8a) を献呈している。これで全ては順調に運ぶ筈であったが、生活の資には全くならず、これから何年もピアノや歌のレッスンで糊口を凌がねばならなかった。1817 年のある日刊紙には、「週二回、有益にして興味尽きぬ音楽技法を伝授いたします」との通奏低音指導の広告が載っている。クーラウは初めから金銭困窮状態にあって、宮廷楽師任命後数ヶ月もたたぬ内に「満足な食物無しでは高尚な芸術活動に必要な精神も快活さも保つことは出来ませんから」と俸給見込み金額の前借りを請願する有様であった。食べ物にも事欠く主な理由は以前からの家族係累の面倒見にあった。1818 年、楽師ユンク死亡で生じた俸給枠請願の際の文書には、「息子として、兄弟として、又近親者を抱え、永年、多数の家族を養って参りました。」との記述に見えるように、1814 年以来、両親と一番下の妹マグダレーナがコペンハーゲンに到来し同居していた。作曲活動の時間を取られることになる定職や地位につくことは、クーラウにとってはあまり喜んですることではなかったとしても、生計の元手は、これが全てであった。1816-17 年には劇場の臨時声楽教師として年 500 リグスダーラーを得ていたものの、オペラ作曲が出来る宮廷楽師として同額の年俸をあてにし、声楽教師の仕事から免れたいものと思っていた *。

* 注：この臨時職の背景には、クンツェンの病気があったようだ。クンツェンが亡くなって、彼の業務はシャルとツィンク Zinck が分担して受け持つ様になったが、シャルが楽長の職にあるなら、クーラウは声楽教師になるのを望まなかった可能性がある。

宮廷楽師としての俸給は当てにならぬ蜃気楼みたいな夢であったが、ようやく実現し、1818 年 4 月 25 日、宮廷布告によって、ユンクの死で空いた枠、年俸 300 リグスダーラーが授与され、職務は、先ず、控えの間あるいは国王の居室でのピアノ演奏、勅命に応じて教会音楽，慶弔音楽の作曲、また命令のないときには、王立劇場用作品の作曲となっていた。この条件は 1821 年 3 月 31 日の布告で変更されて、職務は 1 年おきに、宮廷あるいは王立劇場用の作曲を行うものとすることになった。しかし、1819 年にワイセには作曲家として年俸 1000 リグスダーラーが与えられたのに、クーラウの年俸 300 リグスダーラーという報酬額は一度も昇給することなく、生涯、薄給のまま、やり繰りにあけくれ、いつも心付けや、時折承認される臨時の助成金をあてにするのを余儀なくされる状態にあったのである *。

* 注：クーラウの最晩年の俸給は、承認された年俸を含めて 600 リグスダーラーであった。

1828 年 11 月 1 日、『妖精の丘』初演の数日前のことであるが、クーラウは任官され、公式称号としての教授職に任ぜられた *。

* 注：クーラウはこの功労称号に重きを置き、クーラウ書簡草稿にある、兄アンドレアスに宛てた 1829 年 4 月 25 日の手紙には、「宛名書きには教授殿と付けてくれないか。宮廷楽師クーラウはすでにおさらば、もはや存在しないのだから」の文があり、線を引いて消している。この箇所で、自分の名前のあとに、教授、元宮廷楽師クーラウと記している。

前に触れたように、クーラウの収入源の最大のものとなったのは、フルートであった。ピアノ作曲家としてのクーラウの名もあるが、外国では、フルート作曲家として最も知られており、最近でもドイツで出た本には「有名なフルーティスト」となっている。

たしかにクーラウのフルートなら最も確実と、出版社から胸を広げて歓迎され、金庫を開けて待つ楽器であったし現在でもそうである。フルート嫌いモーツァルトに組みしなかったのは間違いないが、とは言ってもクーラウが特別にフルートが好きであったという証拠はない。当時の趣向流行りがフルート作曲の動機となったというのが実情なのである。本来、副次的な楽器が、流行りとなると、出版社にとっても、愛好家にとっても、具合の悪いことには、レパートリーの元となる目録はこういう楽器には無い上、高名な作曲家達は、定位置がオーケストラの中にあり、オーケストラの他の楽器との組み合わせではじめて意義があるフルートのような楽器は避けて通りがちなものである。それに大家は、高度な技術的問題には通じていないという理由も恐らくあるので、そういう楽器には関係しようとはしてくれないものだ。ところが、類い稀に器用なクーラウは一般には、純粋の専門家にしか理解できないような脇道の楽器にもあっさりと精通してしまい、完璧に楽器の特性にかなった曲が書けるだけでなく、フルートにとっても素晴らしい作曲が出来る人物として、クーラウは一般に評価されるようになったのである。彼のフルート曲は、どれも熟達した笛吹きしか知り得ないような、楽器の知識に裏付けられているのである。その故か、クーラウ自身が著名なフルーティストであったに違いないということになってしまう。1829 年、

出版者ベーメ（ペータース社）に招かれて、フルート四重奏の新曲演奏を聴きに、ライプツィヒを訪れた時のこと、第一フルーティストがフルートに関する技術的な精緻さについて、クーラウと語り合ったことがあったが、クーラウがフルーティストでないと知って、全く信じられないと呆気にとられたほどであった。クーラウについてはとりわけ詳しいとされるオワスコウでさえ、先のドイツの略伝を見たせいか、「デンマーク劇壇」の中で、クーラウを紹介して、宮廷楽団のフルーティスト、加えて卓越した演奏家の一人としているほどである。フルートについては、クーラウ自身、「フルートは一寸吹けるだけですが、特性は良く知っています」と述べている。クーラウの経歴を知りたいという某氏への返事の書簡では、外国でひろく膾炙しているクーラウ笛吹き説の誤謬に言及して、「私はフルートの持ち方すら判らないのですよ」と結んでいる。この言い方はいささか大げさであるが、1829 年の書簡にもこの言葉があり、一方、1813 年の手紙には先の「一寸吹けるだけ」の言葉があるので、この間に、クーラウは、以前習ったフルートを忘れてしまったということの様である。自分の知らないことについてフルートに関する助言をいろいろと仰いだのは、高名なフルーティスト、フュルステナウ Fürstenau の友人で、宮廷楽団のフルーティスト、ブルン Bruun であった。フルートの新曲が出来ると、外国の出版社に送る前に、郊外の鷹狩り遊歩道に住むブルンを訪ね、演奏して貰うのであった。彼の助言、ヒントに耳を傾けるのはまことに有益であった。

フルートは、伝承によれば女神パラスアテネ Pallas Athene が手がけたところ、笛を吹くと、顔が引きつるのが判って、放り出してしまったという楽器である。しかし、当時は流行った楽器で、女神の不快感など気にしない男性たちは大いに練習に励んだものである。従ってクーラウが好むと好まざるとに拘わらず、フルートの作曲をするのは、まさに「義務」であった。「中止！」と叫んで、「新曲に取りかかる前に休養が必要です」、と出版社に状況を説明せざるを得ないほどであった。

クーラウ自身胸中を吐露して、「近頃の状態は、なるほど結構なことではあるのですが、素晴らしいとはとても言えません。国王からの俸給はほんの僅かで、昨年 11 月 1 日、教授任命の栄誉を受けましたが、家族を抱える身としては、少ない俸給では生きていけません。出版社の求めに応じて、実入りのいい器楽曲などを書かねばなりません。目下のところ、ほとんど全てフルートのための作曲です。イ長調四重奏曲くらいの長さの曲だと、一曲ちょうど 68 ドゥカートほど入ってきます。」と、1829 年 5 月 5 日の手紙に記している * 。

* 注：晩年、クーラウが得た報酬はふつう、１ページあたり１オランダ・ドゥカーテンであった。しかし全紙刷り１枚あたり３オランダ・ドゥカーテンで書かされることも度々であった。

もし、なんとか生計を立てられるだけの定額年収があったなら、クーラウの作品の大半は生まれなかったのかも知れない。実情はしかし、まさに生活のために身を売って出版社の求めるものは何でも、作曲せざるを得なかったのだ。出版社の要求は止まるところを知らなかった。ある時は、何調の曲を、ある時は、快活で輝かしく、しかも、難しくないものを、ある時はページ数は必ずこれ以下のをと、要求してくるのである。パリの出版社ファランク Farrenc の時など、堪忍袋の緒も切れんばかりであった。これこれの長さを越えてはならないといわれて書いた曲が、短かすぎると言ってきたのである。クーラウは大いに抗弁し、「注文の楽曲には、何ページと決め、それ以上でもそれ以下でもまかりならぬとするような制限を付けられるとしても、曲のファンタジーに枠がはめられるものでしょうか。ロンドは２ページ増やせるでしょうとのそちら様の要望ですが、全く理解出来ません。そんなつぎはぎ細工をしたらこのロンドは台無しになってしまいます。」と。こういった出版社の横暴からの逃れ道はレッスンだったかもしれない。しかしレッスンですら悪夢だったようで、『ルル』に着手する以前に、おおかたは投げ出してしまっていた。「レッスンほど嫌でたまらないものはありません。私の音楽理念を暴力的に邪魔するのですから」と書いている。貴人も庶民も子弟のレッスンを依頼して来たが、これは無駄に終わった。一人に駄目と言えば、似たり寄ったりの他の全ての弟子に駄目といわざるを得ないのだから。モシェレスも、目をかけていた青年のレッスンをクーラウに直接、頼んだことがあった。大いに敬意を払っていたモシェレスではあったが、クーラウは説得されなかった。このときのクーラウの弁明は、モシェレスの依頼に応えたとしても、それがかえって、強力な敵の目を覚ましかねないから、というものであった。一方、作曲指導は別で、いつでも相談に乗ったのである。若い作曲家達の手による作品の校閲添削は喜んで引き受け、無償のことも度々であった *。

* 注：作曲家として世に出た弟子には、Fr. フローリヒ、オルガニスト　ヨハンネス・ゲバウアーがいる。フローリヒは劇的な昂揚を見せ、流麗な様式で注目されるバレー音楽を著し、偉大な師の弟子であることを証明している。ゲバウアーは特に童謡、賛美歌作曲、彼の手になるピアノ教本で、また教師としてデンマーク音楽家の中で傑出した地位を築いた。ヘルマン・レーウェンスキョルは確かにクーラウの弟子とは言えないが、クーラウはいつも彼の家族の仲間であり、少年時代からずっと世話をし、その将来を期待していた。1830 年の手紙に、クーラウは彼に触れて書いている、「ドイツ出身の 10 代の少年がコペンハーゲンでピアニストとして成功する見込みはどれほどあるだろうか。有能なピアニストが大勢いるコ

ペンハーゲンでは疑わしい。その中にあって、ヘルマンはレーウェンスキョル男爵の思っているように神童で小石に対する本物の魔法使いなのですから」。レーウェンスキョルはいろいろ美しい作曲で業績をあげたけれども、クーラウの期待にふさわしい地位につくには至らなかった。他には、ゲーオ・ゲアソンの息子のニコライ・ゲアソン、宮廷楽師リゥーダースの名があげられるが、ともに死後忘れられてしまった。それに宮廷楽士モーア。故アントン・カイパー大尉は大変な音楽愛好家で、クーラウの弟子でもあり、関係は密接であった。

フルートに続くものはピアノである。ピアノはクーラウの本来の楽器であり、収入源として重要なものであった。しかし、フルート曲ほどは、ピアノ曲は実入りは良くなかった。フルート作曲家としてはクーラウは唯一無二の立場にあったのだが、ピアノ作曲家はいずれにせよ外国に大勢いたからである。しかし、ことは日々の糧の問題であって、おびただしい数の、変奏曲、ロンド、メドレー曲が、クーラウの手になって、世に溢れ出て行くことになる。曲の主題は、クーラウ自身が選ぶよりも、出版社の意向によることが多く、それも、例えば、評判のオペラのメロディーをこういう曲に仕立ててと注文されるのである。ワイセは言う、「クーラウは名声と栄誉のために作曲する」と。まるで、クーラウ個人の尊厳に深刻な危機が迫っているかのように、傍からは思えるほどであった。このようなつまらない仕事をやっていては本来の芸術作品を創出できる様になるとは思えなかったし、急いで作曲するような紋切り型の仕事に取り紛れていては、三流作曲家と同列に身を置くことになる、と皮相的には思える。しかし、無意味あるいは中味に欠ける作品をかくも多量に産出した作曲家で、クーラウほどに優れた作曲家は恐らくいないのではないか。クーラウ自ら記す、「芸術家といえども、霞を食っては生きていけないという諺は全くその通りです」。メドレー曲やオペラ変奏曲は現在では大半が忘れ去られている。しかし、これらのピアノ曲の中には、デンマークのみならず諸外国でも、今日生き続けている、一連の重要な曲目があるのが注目される。二手あるいは四手のためのピアノソナタ、ソナチネ、ロンドである。これらの曲で、クーラウはピアノ教育上、大変重要な意味を持つ作曲家になった。皆、演奏が容易になるように特に配慮した曲で、ピアノを始めた、幼い子供たちでも自分のものにすることが出来るようになる最初の作曲家がクーラウなのである。易しい曲であると同時にとても優れた曲なので、ピアノ音楽にさほどなじみのない聴き手にとっても、得るところのある音楽であり、指に易しくピアノにとりわけ向いた曲なので、熟練していなくても、そこそこの成果ををあげうる音楽なのである。強いることなく、満足感を与えてくれ、音楽として完璧なこれらの作品が、初心者や、ベートーヴェンに取り組むほどには進んでいない者にとって有益なことは、計り知れない。同時に、いろいろな意味で啓発的で、演奏の感じを会得するのにも役立つ曲であるから、ピアノ演奏家は、大家であれ、弱小であれ等しく、クーラウに多くを負っていること知っているはずである。これらの作品を作曲するときの、クーラウの迅速さと勤勉さは特筆に値する。C.C. ローセ出版社から、ソナチネ作品 55 と同じくらいの 12 ページを越えないバガテルの執筆を大至急と依頼されたときなど、クーラウはちょうど、オペラ『フーゴとアーデルハイト』Hugo und Adelheid の作曲中であったが、ローセの望み通り、24 時間で仕上げた。これが作品 88 で、作品 55 と同じく今日でも、ピアノ初心者なら誰でもが手にする曲である。クーラウのピアノ小品は、クーラウの時代でも既に大曲をしのぐほどの人気であった。「私の作品が、お嬢様のお気に召したと伺い、光栄に存じます。私の謝意をどうか、お嬢様にお伝え下さいますよう。ところで、お手紙によれば、私の小品のことのみお話になっておられますが、それらは、差しあたり初心者あるいは中級程度のピアノ演奏者のために書いたものです。熟達したピアニストのための大規模な曲もたくさんあるのです。」と、わざわざ、クーラウが手紙に書くほどであった。クーラウにとって小曲作曲は一種の気晴らしであった。レッスンを別にすれば、音楽に関わる仕事は、本来すべて興味のある仕事であった。あらゆることに関心を持っていたので、出版社の意向に添った仕事にも、満足を感じていたようだ。かのカライドアクスティコン *Kaleidakustikon（音楽万華響）も音楽関連の珍品というべきであろう。

* 注：カライドアクスティコンはハンブルグのベーメ Boehme 社から「クーラウのカライドアクスティコン」として売り出された。それは大きめの箱状のもので、その中にはそれぞれにアルファベットが記された紙束が入っている。一小節または二小節の音符が書かれたものが一つの束にまとめられ、その束より一枚ずつ楽譜を取り出しアルファベット順に並べると音楽（ワルツ）が出来上がる。1853 年刊デンマーク口語辞典第５巻の記述には「それ以前の同様のものよりクーラウが発展させた音楽的カード。さいころによって無尽蔵のワルツを作曲することができる」と書かれている。

クーラウの作品は「銀行紙幣」の様に飛ぶような売れ行きを示した。それなら、フルート曲では需要が多く、どの出版社にも多大の利益をもたらしたので、これらのピアノ曲でも、同じように、出版社を意のままに出来たと思えるところだが、出版社ときたら御しやすい連中ではなかった。話が、フルートでなく、ピアノとなると、連中はうわの空のように知らん顔。ブライトコップフ＆ヘルテル社とは、1822 年来あった取引関係が、出版社の申し出で突然に取りやめになった。クーラウが 1821 年にライプツィヒでヘルテルと個人的に交友関係を結び、互いに信頼関係を築いていたにもかかわらずである。クー

ラウはいつも謝金が少ないと苦情を言い、既に 1812 年、ヘルテルにこう書き送っている。「ソナタ 1 曲、ワルツ 10 曲、協奏曲 1 曲にもなるのに、請求額は多すぎるといわれるのには当惑しています。こう言われますと、作品出版の意欲が全くなくなってしまいます」。取引関係が中断された際、クーラウはミスプリントの苦情を重ねて言い、ブライトコップ＆ヘルテル社の刊行する「一般音楽新聞」に掲載された自分の作品に関する批評には同意出来ない旨を書き送った。ボンのジムロック Simrock は多くのクーラウ作品の出版を手がけたが、それで損害を蒙ったとまでクーラウに聞こえよがしに言うのである。クーラウは記す、「ニコラウス・ジムロックはおかしな爺さんで、売れもしないあなたの曲は高い高いと文句を言うくせに、たくさん出版しています。ピアノ四重奏曲作品 50 では損をしたとのことですが、正直に本当のことを言っているのではなく、少なくともドイツの出版社の誰もがその逆だと知っています。作品 50 の増刷りがどんなにたくさん出たことか。ローセが重版してくれただけではなかったくせに」。こういう状態なので、フルートが加わった曲でない限り、入念に仕上げた大曲を出版しても、クーラウは報酬を当てにすることは出来なかった。いつもフルートを入れた曲ということを念頭に置くようにしなければならなかった。例えばパリのファランクに出した手紙には、永らく貴殿と奥様に曲を献呈したいと考えていた、といって、「ピアノ、ヴィオラ（またはヴァイオリン），チェロ、とフルートの四重奏曲は如何でしょうか。こういう曲なら、売れ行きは期待できると思いますが。」と訊ねている。しかし、この曲は日の目を見るのは難しかったようで、代わりに、「3 曲のフルート五重奏曲作品 51」という重要な作品が出版されている。「二本のフルートのための協奏二重奏曲」* は高く評価された作品である。

訳者注 op.119

批評家たちは、この曲について、「この難しいジャンルでの名人芸の見せ方を、クーラウは良く知っている。二重対位法についての深い洞察が見事に反映しているのである」と言っている。クーラウは改めて晩年にフルート五重奏曲を依頼されるが、仕上げを楽しみたいと、ずっと考えていた。

大衆を当てには出来ない以上、作品出版には何かと困難はつきもので、少なからず作曲意欲の妨げになったに違いない。クーラウの最後のト短調ピアノ四重奏曲は *、その例のひとつである。

* 訳者注：作品 108

1820 年、３曲のピアノ四重奏曲にとりかかり、冬の内に仕上げるつもりであった。このうち、ハ短調作品 32 が最初にできあがり、ブライトコップフ＆ヘルテル社から出版され、次いで、イ長調作品 50 がジムロックから出た。しかし、３曲目はとりあえずあきらめたらしい。そうこうしているうちに、クーラウに心酔していたロシア人、ペテルスブルグの商人ウィトゥスキー Withowsky が、40 部買い取り、娘への献呈という条件で、ピアノ四重奏曲を所望するということになった。クーラウはこの親子に一度も会ったことはなかったが、大いに喜んで、作曲ならびに献呈に同意し、かつ、ウィトゥスキーに宛てて、40 部買い取りといっても、それは出版社の利益となるもので、クーラウの利益とはならないことを注意し、楽譜出版自体を念のため万が一に備えて、ウィトウスキー自身が取りはからってくれるのが、最も好都合であると申し述べた。ウィトウスキーは、自費出版の話には乗らなかったのだが、クーラウはこの曲の作曲に、結構、乗り気になり、1829 年の外国旅行から帰国すると直ちに作曲に着手、８，９月のうちに書き上げたのであった。ウィトゥスキーによる 40 部買い取り見込みの話は、出版社にとって、旨い話であったに拘わらず、交渉ははかどらない。そこで、クーラウは、最近立ち寄った際に好誼を受けたことのある、ライプツィヒのベーメに相談したものの、断られてしまう。ボンのジムロックでも同じ結果。「かくなる次第で、細心注意を払って仕上げた曲ですが、お蔵入りにせざるを得ません。」とクーラウは記している。最後にファランクに話を持ちかけたところ、ファランクは検討の結果、印税引き下げを条件に、出版を引き受けてくれた。印税引き下げの件は、他の出版社に知られることのないよう内密にとクーラウは懇願している。この作品は、クーラウの死亡一ヶ月前になっても上梓されるかどうかはっきりせず、結局、遺作として、1833 年出版された。献呈は、ドローテ・ウィトゥスキー嬢である。こういった煩わしいことが続いたあげくに日の目を見たピアノ四重奏曲であるが、演奏はかなり前に輝かしいデビューをしている。酒類業者オーエペータースン主催で、町の著名な音楽家や名士が揃うのが通例の、有名な夜会で、クーラウ自らピアノを弾いた 1829 年 10 月の集いはとりわけきらびやかなものであった。当時の音楽界で人気高く、コペンハーゲンでセンセーションを巻き起こしたモシェレスが出席し、エーレンスレヤー、ワイセ、クーラウを先頭に、次々と多くの知名人が集まった。モシェレス評伝に収録されているモシェレスの書簡にこの夜の模様が語られている。夜会はト短調ピアノ四重奏曲（ピアノはクーラウ）で開幕し、つづいて、チェロのカプリッチオの伴奏をモシェレスがし、３本のホルンによるカプリッチオとつづき、モシェレスの独奏の番になった。モシェレスは、ワイセの演奏も聴かせて欲しいと聴衆とともにワイセに迫ったのだが、ワイセは耳を貸さないので、モシェレスはピアノに向かわざるを得なかった。「まるで壁に取り囲

まれているようだった」。「僕が一寸思案する間、しーんと静まり返った。クーラウやワイセの様に博学だったら、ハーモニーに溢れた出だしにするのだが・・・、そしてセンチメンタルな風にして、締めくくりはヴィルティオーゾで嵐のように終えよう、と考え、演奏した。上手くいったように思う。一斉の大歓声、息を呑んで皆が互いに顔を見つめ合う様子なんて、僕の演奏でこんなことは、君は経験したことがないだろう。老シャル教授が僕を抱きしめてキスし、クーラウもワイセも飛びついてきて、息つく暇もないほどだった。」

このト短調四重奏曲について、モシェレスは、豪勢で入念に作り上げられた曲ではあるが、類似作品があるような感じがする。クーラウの演奏は、難しい箇所を必ずしもこなしていない、と述べている。クーラウの死後数年たって、同じくオーエペータースン主催の音楽会で、このト短調を聞いたマルシュナー Marschner は、自分は前の２曲の方が好ましいと言ったということである。クーラウ自身はこの曲を自己最高の作品と思っており、音楽仲間も同意見であると述べている。このピアノ四重奏は３曲ともスタイルの流麗さ、メロディーの美しさが特徴である。ピアノパートは、クーラウのピアノ曲に総じて言えるように、いかにもピアノ向きで、ピアノ演奏の大家にしか書けないような曲である。モシェレスのコペンハーゲン出発に際し、リュンビューにいたクーラウは、手紙を出して、個人的好誼を得たことは生涯で最高の出来事と記した。モシェレスの演奏に感謝する印として、謎のカノンを一曲届けた。「いわば、別離の哀感、再会の期待を込めて」の曲として。このカノンの解答は同封してあった。後に触れる予定のクーラウ書簡草稿をみると、「解答は別便でお送りします。貴殿が頭を悩ますことのないよう、貴殿の頭脳はもっと有益なことに活用されんことを願ってです」と最初付記し、「かくも頭を悩ますこと」を前提にするのは不作法な言辞と思ったのか、線を引いて消している。

第５章

バーデンのラウエンシュタイン城（廃墟）とヘレナ峡谷

クーラウは天性の芸術家であった。自分の芸術第一に生きるというだけでなく、彼の人間性そのものが自由を求め、強制を厭う人であった。彫刻家や画家を見れば判るように、たいていの芸術家も同じである。それ故，堅苦しい社交界に足を運ぶのは全く好きでなかったし、特にエチケットを要する場は嫌いだった。宮廷楽師という身分上、しばしば、宮廷での演奏を所望されたが、宮廷では自分の勝手には振る舞うことなど出来ず、「宮廷に参内するのは全く！」と嘆くのであった。ある宮廷夜会で『魔法の竪琴』のピアノ演奏を行った。第 1 幕を大変緊張して終え、盛んな拍手を受けた。王妃陛下も手ずからクーラウにお茶をお入れになった。クーラウはかくも稀な厚遇にしばし立ちつくしたのだが無邪気といおうかこう言ったのである。「ありがとう御座います。ですが、叶いますればきゅっと一杯頂きとう御座います」。王妃は他のものを所望されるとは考えてもいなかったが、直ちにコニャックを与えるよう命じられたのである。

皇太子クリスチァン公はいつもクーラウのことを心に置かれていたし、クーラウもご同席を窮屈に感じたり、居心地が悪いということはなかった。フレデリーケ・ブルン Friederike Brun 夫人宅は、最初の頃はよく訪れた。そして好きなだけ滞在して良いと言われたがそのかわりに、夜会の時にはイーダ・ブルーン Ida Brun の伴奏を引き受けることにした。イーダ・ブルーン嬢の歌唱にはクーラウはいたく感動し、天国の歌のように美しいと賞賛していた。この家で、クーラウはイタリア語をいくらか学んだようで、イーダに 6 曲のイタリア歌曲を献呈している (訳者注：op.9)。しかし、総じて言えば、ブルン家での生活は合わなかったらしく、就中、この家に頻繁に出入りしていた若い頃の J. L. ハイベア Heiberg、(「のっぽ野郎」と呼んでいた)、は、あまり好きではなかったようだ。こういった豪奢な環境から、いつかは、遠慮せずに逃げだそうと考えていたことだろう。

これに比べて、あるがままに振る舞えて自宅にいるのと同じに思える家があった。後に枢密院顧問官になるナータンソン Nathanson の家など、週に一度やってきて、娘たちにピアノを教え、夜会では伴奏したり、時には辛抱しながらも、食後のダンスに合わせて演奏もした。また卸業者トリーア Trier の家もよく訪れたし、ゲントフテ Gientofte にいるトリーアの家族のところには長期滞在もした。そこでは、画家エルンスト・マイヤー Ernst Meyer にも会っている。陽気で羽目を外すマイヤーにはクーラウもいたく気が合って、愉快に楽しんだ。ゲントフテでは、ボーリングに熱中したり、谺のよく響く場所に出かけては、「Wesel の市長は誰だい？ Esel（とんまのロバ）さ」とやって、飽きもせずうち興じるのであった。全く気が置けなくてしょっちゅう訪れた家は詩人のヘー＝グルベア教授宅である。二人とも出会ってすぐ親友同士になり、ともにノアブロ Nørrebro にあって、クーラウは永いことブライク通り Bleichwege に住んでいたし、グルベアは後にその名がつくことになる通りに住んでいた。(* 訳注：Nørrebrø にはクーラウの墓地のある Assistens 墓地があり、そのすぐそばに Guldberg 通り、Bleichwege 現在の Blegdams vej がある。）金曜日の夕方はいつも、グルベア家は大勢の友人に広く開放されていたものだが、クーラウは歓迎され常連の客であった。草花画家のフリッチェ Fritsche、俳優のゲルストロプ Gjelstrup、砲兵隊少尉アントン Anton とレオポル・カイパー Leopold Keyper 兄弟、宮廷楽師のブレダル Bredal など、クーラウの感動的な演奏がいつも聴けるものと、それを楽しみに出入りしていたのであった。コペンハーゲンを訪れる外国の著名な音楽家をクーラウは、グルベア宅の夜会によく連れてきて、冗談を楽しんだり、真面目な議論をしたり、演奏があったりで、居合わせた人々は忘れがたい時を過ごしたものである。

ここでは、みなが好意を寄せてくれることをクーラウは自覚しており、包み隠さず自分の生活についてよく話したりして、まさにこの会の中心人物であった。提示されたテーマでクーラウの演奏する即興ファンタジーは最高に美しいものであったに違いないが、グルベア家で本気になってやるときの即興演奏は格別のものだったろう。ある晩、特別の即興演奏があった。シュンケ Schuncke 兄弟、共に名手と評判のホルン奏者であるが、クーラウは彼らを連れて現れた。この日演奏された即興はピアノとホルンの協演でピアノがテーマを提示し、ファンタジーに移り、ピアノあるいはホルンが入れ替わりで主声部を受け持つ形の変奏であったが、邸前の街路は演奏の間はじっと静かに聴き入る人々で一杯になってしまった。みな演奏を聴いて興奮していた。クーラウは何でも初見で演奏するのが得意であった。グルベア宅に来ると、いつも息子に何か新しい楽譜があるかを訊ね、初見で曲を弾き興ずるのであった。つまらない曲だと弾きながら大声で笑い出し「とてつもない馬鹿な作曲家だな、こいつは」と言って弾き止めるのだ。しかし美しい感動的な曲だと、演奏を中止して、じっくりと楽譜を読み直し、自由自在の即興ファンタジーに仕立てるのである。この上なく魅力的なファンタジーが仕上がったときなど陽気なゲルストロプが飛んできて、クーラウの頭を抱えてキスし、「君はサタンの天使だ、こんな演奏をするなんて！さあ、ご婦人方、皆様のキスをどうぞ！」と言うのだが、クーラウにとっては、これが願ったりの提案ではあり得ず、庭に逃げ込んでしまい、部屋に戻ろうとはしない。全員で迎えに行ってやっと中に入るのであった。女性に取り巻かれると、はにかんでしまうのを

見て皆はまたクーラウをからかうのである。グルベア家では、クリスマスにはリンゴケーキで客をもてなす習わしがあった。このリンゴケーキにはとびきり辛い芥子を焼き込んだのが一個あって、これを手にしたら、そのお客は食べるきまりになっていた。ただし、素晴らしいプレゼント付き。ある時、クーラウがこの芥子入りケーキを選ぶという幸運を引き当ててしまい、昔からの慣習だから食べてと皆がはやし立てるのだが、クーラウは何とか勘弁してと哀願するのである。すると若い美人が歩み出で、問題のケーキをとって平然と食べてしまった。そして言った。「あんなにも素晴らしい演奏で感動させて頂いたのですもの。この方の重荷をとって差し上げるのが女性の義務でございます。」そしてプレゼントの方はクーラウに差し出したのであった。クーラウはもじもじして乙女のように真っ赤になって、目を伏せ席に座り込んでしまい、一言もしゃべることが出来なかった。クーラウの恥じらい振りは長いことからかいの話題になったことは言うまでもない。グルベア家での舞踏会のこと、クーラウは思いついて隣りの談話室に行き、当時用いられていたイギリス風の舞踏曲を作り始めた。クーラウはこれを楽器４種の曲に仕上げ、食後の最初のダンスに合わせて演奏した。もちろん嵐のような大喝采であった。クーラウはこの舞踏曲は出版しないという条件を付けたので、楽譜は存在していない。グルベアはクーラウの求めに応じていくつもの美しい短詩を作り、クーラウはこれに曲を付けた。「永遠の花」、「死にゆく子」、いくつかのデンマーク民謡もこういった作曲による。

　クーラウが元気爽快になるのに最も良いものは自然であった。自然の及ぼす快い開放的な力の感覚が、彼の音楽には、いつもほとばしり出ている。『盗賊の城』、『妖精の丘』の狩人の合唱、四重唱などで判る通り様々な自然の印象が、音楽の中に織り込まれている。クーラウ自ら言うように、「自然に浴するようにつかると、音楽の心髄が刺激」されるのだった。クーラウは健脚で、遠くまで休むことなく歩いた。自宅のあるブライク通りからロスキレ迄歩き、そこの教会堂をじっくり眺め、昼食を終えて、その日のうちに帰宅するなんてことをするのだ。しかし、とにかく旅行はクーラウには不可欠のことで、考えるだけのこともあったが、いつも旅をしていた。スウェーデンが目的地となることが幾たびかあった。1815 年の 1 月末、先に触れたホルン奏者の一人、ヨハン・クリストフ・シュンケと組んでストックホルムに演奏旅行をしている。長い旅で翌４月に、演奏会を２度開いた。最初の演奏会は 4 月 13 日。聴衆は少なかったが、彼の作曲の評価よりもピアノ演奏が好評を博したことで慰めとせねばなるまい。この時の曲目は、コペンハーゲンの評判で知られた超絶技巧曲で、最初の 8 年から 10 年によく演奏会で取り上げられた曲、ピアノ協奏曲ハ長調と『水運び人』のアリアの変奏曲（* 訳注：Op.12. ケルビーニのオペラ “Les deux Jour” 別名 “Der Wasserträger” の中のアリアによる）であった。4 月 29 日の 2 回目の演奏会は、既にコペンハーゲンで知られていた別のピアノ協奏曲 [焼失] と、英国国歌のテーマによる変奏曲、スウェーデンの歌と舞踏曲のメドレー曲で終わった。『妖精の丘』の作曲家たるクーラウはスカンジナビアの素晴らしいメロディーには既に精通しており、後年、これらの民謡を使って巨匠振りを発揮することになる。スウェーデンの批評家たちはクーラウのことを才気に富み、入念な仕事をする音楽家として認めていた。クーラウは功績をたたえられて、後にストックホルムの王立音楽アカデミー会員となるのである *。

* 注：同時にライプツィヒ詩歌音楽協会会員にもなった。

今述べたスウェーデン旅行は金銭的な収穫もなしではない。コペンハーゲンに居る父親が息子アンドレアスに宛てて、フリッツ（訳注：クーラウのこと）は今度の旅行で十分な報酬を得るであろう、旅行費用を賄い、なにがしかの余剰も生まれようと書いている。確かにこの旅行は、クーラウの気分をますます煽ったようで、コペンハーゲンに戻って間もなく次の旅行を計画し、1816 年春にはハンブルグにやってきている *。

* 注：如何に忙しかったか、ハンブルグ滞在中、姉のアマリエに宛てた手紙の行間にうかがえる。アマリエはハンブルグ商人のニルス・イェプセン Nils Jepsen と結婚していた。「お姉さん、明朝伺うつもり。これまで行けなかったのは、昨日は一日中アルトーナ Altona。夜は博物館でピアノ演奏．今日はヴァンツベック Wandsbeck 行きという具合だから。たぶん明朝までそこにいるはず。それじゃ、イェプセンによろしく」。この手紙には日付が無いが、十中八九、この時の旅行のものであろう。

イェーテボリ Gothenburg には、特別の関わりがあって、弟子の音楽家カール・シュヴァルツ Carl Schwarz が住んでいる町であり、何度も訪れている。シュヴァルツの弟子でもある女性二人はクーラウから作品の献呈を受けている。そして、スウェーデンへの小旅行にも触れておかねばなるまい。この旅行はとても楽しい結果をもたらすことになる。クーラウは手許がいささか不如意になって Op. 60 のピアノソナタを作曲したのだが、出版社が送ってきた報酬は少額でしかなかった。そして、然るべき貴人への献呈をされては如何といってきた。出版社の手紙を受け取ったその晩、グルベア宅に赴き、報酬の少ないことを打ち明け、曲の献呈は誰にすべきかと相談した。グルベアはスウェーデンの友人かつパトロンのノルケン Nolcken 男爵に献呈をすると喜ばれようと勧め、クーラウも同意した。ソナタの印刷が出来上がり、献呈辞を添えて、12 部を男爵に

届けると、折り返し 100 ドゥカート入りのきれいな金の箱とヘルシンボリ Helsingborg への招待状が送られてきた。クーラウは有頂天になって、男爵の農園に招待され、素晴らしい自然の中で 14 日間過ごしたのであった。クーラウはノルケン・ソナタのことは長く心に留めていた。後年になって、ノルケンの名が楽譜のタイトルに再び登場することになる。今度は、献呈ではなく、「ノルケンのために作曲」と書かれている（訳注：op. 125）。

クーラウの想いは、とくにモーツァルト、ベートーヴェンの国であるドイツに寄せられていた。1821 年に、ドイツに向けての大旅行が始まった。2 月 20 日には王室から 2 年間の旅行許可を得、その間の作曲業務は免ぜられることになった。出発は 3 月、この旅行はおよそ 1 年位しか続かなかった。旅行はライプツィヒ経由で、ザクセンスイス（ドレスデン郊外）に赴き、パラダイスのような自然に感嘆する。そして究極の地、ウィーンに到り、レオポルドシュタット Leopoldstadt 区のチェルニン Czernin 通りチェルニン家屋に宿泊する。ヘルテル宛の手紙に、ライプツィヒでは、出版社ヘルテルには親切に世話になったこと、いろいろと教わったこと、住居の情報も貰って、作曲に専念出来る下宿で快適さを満喫していることなど述べている。1821 年 9 月 22 日付けのコペンハーゲンの材木商ヤコブ・トリーア Jacob Trier に宛てた手紙には旅行の印象、ウィーン滞在の様々な状況が描かれている。「トリーア様、貴方のお手紙、どんなに嬉しかったか、ナータンソン家のベラ Bella 嬢ハナ Hanna 嬢のサインを見てどんなにうっとりとしたかご想像になれないほどでした。白状しなければなりません。もっと早くお手紙を差し上げるべきであったこと、私のだらしなさにいらだたしい思いをしているのです。大切な友人のことをいとも簡単に忘れてしまう人間とはお思いにならないで下さい。貴方、貴方のご家族のことを常に考えているのは瞭然のこととお考え下さい。さて、ウィーンのこと、ウィーンでの生活のことをお知らせしましょう。お話しすることは山ほどあって、音符しか書いたことのないペンが言うことを聞いてくれさえすれば、長い手紙にもなりましょうが、そういう自由な筆ではありませんので、短い手紙ですがお許し下さい。ウィーンの街は住人共々、屈託のない、親切なところです。誰もが楽しみのために生き、楽しみを享受しているのです。自然も芸術も、どれを選べば良いのかわからなくなるほど、誠に多様な楽しみを差し出してくれるのです。そのような数々の公共施設に加えて劇場が 5 つあり、毎晩開演しています。王立劇場、即ちブルク劇場 Burgtheater とケルントナー門 Kärnthnerthor 劇場の 2 つが最高で、著名な芸術家が会員となっております。一寸、名前を挙げれば、劇作家ツィーグラー Ziegler, レンベルト Lembert、ヴァイゼントゥルン夫人 Weisenthurn の方々です。演劇が此処では総じて素晴らしく、オペラよりもよく観に行きます。残念ながら、オペラ界ではロッシーニの不健全な流儀が幅をきかしているからなのです。先日聴いた、グリュンバウム夫人 Madam Grünbaum は第一級の、最高の歌手ですが、私の聴いたのはロッシーニのオペラだけでした。涙と狂騒の立ち回りに明け暮れ、ウィーンで大人気の『どろぼうかささぎ』なんて、耳をつんざくトランペットとティンパニーだけでなく、大太鼓小太鼓、シンバルにトライアングル等々、感覚が麻痺してしまい、門限ラッパを路上で聞いたみたいにオペラを中座した人と一緒に、「神様、しっとりした音楽をお聴かせ下さい」と、叫びたくなる位です。これまで、たった一度だけモーツァルトのオペラがありました。『魔笛』です。観客は少なく、拍手が起こるのはモーツァルトの高貴なメロディーをロッシーニ風にうなりをきかせ、飾り立てて歌ったときだけ。はっきりしているのは現在のウィーンの音楽趣味は最高ではないと言うことです。

まあ、私は自分流に暮らしていて、まことに快適です。午前中は、作曲、午後は散歩するか、ウィーンの名所見物、夜は観劇です。観劇が最高の楽しみです。著名な芸術家と知己になりましたが、他の人とはあまり付き合いはありません。敢えて避けているのです。滞在費用の捻出につとめる必要があるし、付き合いは仕事の邪魔にもなりますから。
今度の旅行は本当に楽しいものでしたが、かえってそれだけ、コペンハーゲンに愛着を覚えること繁く、両親やコペンハーゲンの友人が切に想われるのです。これからはコペンハーゲンでもっとのんびりと暮らしたい。音楽出版者と培った個人的な関係を活用して、情報提供の仕事はやめ、作曲の報酬だけで暮らしたいものです。イタリアに行くかどうかはまだ白紙ですが、2,3 週のうちにミュンヘンは確実に訪れるつもりです。此のドイツの主要都市をあちこち一寸回ってみて、来春にはコペンハーゲンに戻るつもりです。此処に来て、コペンハーゲンに想いを寄せるという楽しみを味わいました。ウィーンには宮廷楽師ヴェクスシャル Wexschall 氏も来ています。来週はパリに出かけるとのことですが」

この年、シューベルトがデビューする。ベートーヴェンと同じくウィーンに居住し、作品 1，ゲーテの「魔王」を発表するのだ。もしクーラウとシューベルトとが出会ったとしたら、きっと共感し合ったことだろう。多くの点で、二人の気質には一致するところがあるのに注目すべきであろう。クーラウが尊敬してやまなかったベートーヴェンとの会見の願いはこのときの旅行では実現を見なかったが、1825 年の 2 回目のウィーン旅行では、運良く願いが叶って、知己を得ることとなった*。

* 注：イグナーツ・フォン・ザイフリート Jgnaz von Seyfried 著「ベートーヴェン研究」に記述がある。

今度は短期間しか滞在しないけれど、ベートーヴェンに直に会い親交を交わすまではウィーンを引き上げまいとクーラウは決めていた。しかし会うのは簡単なことではない。運の悪いことにはベートーヴェンはウィーンには居らず、数時間離れたバーデンで夏を過ごしていたのである。しかし、如何なる障碍ももはや問題とはならない。「尊敬すべき客人」クーラウのためにハスリンガー Haslinger 氏が、準備を整え、9 月 2 日、バーデンへと向かった。一行は音楽院教授のゼルナー Sellner、宮廷楽器製作者コンラート・グラーフ Conrad Graf、ベートーヴェンの友人ホルツ Holz である。ベートーヴェンは一行を大いに歓待し、着いたばかりというのに、大声で、「さあさあ、外へ出かけよう」と、皆を引きつれて飛び出して行き、あまりの足早で皆が追いつけないほどだった。道があろうがなかろうが、ベートーヴェンは、好きな場所はみな見せたがるのだ。まるでカモシカがラウエンシュタイン、ラウエンエック城址 * に駆け上る如しである。ここからは素晴らしい展望が楽しめるのだ。かと思えば、此の先導者は、一人の手を握って、次の高みへと間断なき遠足を急ぎ、息せき切って追いかけてくる連中を眺めて密かに楽しんでいるのだった。(* 訳注：Baden の西にあり、西に向かって右が Rauenstein, 左が Raueneck。その間に Helenental がある。川の名は Schwechat)

美しいヘレナ渓谷では、一行は、やっと切り抜けた苦行を補ってあまりある昼食を楽しんだ。客は彼らだけであり、疲れたと言ってもそれだけ、自分たちの元気活発ぶりを振り返って、心地よく思えた。ヘレナ渓谷で飲んだ、まろやかな味わいのズィレリー Sillery でご機嫌となって、それまでの債務はすっかり帳消しになり、ベートーヴェンの家ではがぶ飲みのフェスラウアー Voeslauer で、宴会の締めくくりをすることになった。家の主は最高にご機嫌であり、客人たちも夢中になった。クーラウは即座に、Bach の名前をなぞってカノンを書いた。ベートーヴェンは「フリードリヒ・クーラウ氏に寄す」のカノンを書いた。言葉をひねって、「冷やして！生ぬるいのは駄目！」などなど。ベートーヴェンはこのふざけたカノンをしまったと思ったらしく、クーラウの気を悪くしたのではと心配して、翌日、一筆したためている。「白状します。昨日はシャンパンですっかり酔っぱらってしまいました。酒が入ると作曲力が増すどころか、それを妨げるという経験をまたまたしてしまったようです。他のことは即座に答えられる状態に今いるのですが、昨日何を書いたのか皆目分からないのです。敬具」ベートーヴェンがこの手紙を書く必要があったとは思えない。皆がはしゃぎ回っていたし、ベートーヴェンの冗談も無邪気で自然なものだったのだから。ベートーヴェンが我がクーラウを見下して冷たくあしらったとする向きもあるけれども、上記の引用を見れば、そういうことはあり得ないことがわかるであろう。この点に関しては、ベートーヴェンについて、クーラウは親しい思い出を持っていたということ以外、聞いたことがない *。一行がウィーンに向けて出発するとき、ベートーヴェンはクーラウに「一寸待って」と呼びかけて、「肖像画の本人からクーラウへ」と自署した自分の肖像画を記念に贈呈した。このベートーヴェンの署名入りの肖像画は現存している。

*注：1873 年 10 月、エジンバラレビュー Edinburgh Review に、ベートーヴェンに関する記事があり、「祖国」1874 年 2 月号に転載されている。「自分の前でぺこぺこせず、崇拝しようとしないクレメンティ、ケルビーニ、フンメル Hummel、ウォルフ Wolff などと、ベートーヴェンが、縁切をしたり、クーラウのような数少ない崇拝者でも、励ましどころか冷たい言葉しか貰えなかったと考えるのはつらいことである。クーラウの弟子の証言によれば、クーラウはモーツァルトを最高としていたが、ベートーヴェンの大崇拝者であった。また、ピアノ奏者としてコンサートに出演の際、自分の曲を演奏しないときにはクーラウは好んでベートーヴェンを弾いたということも記すべきであろう。」 ラウン著 V.C. Ravn：「古い時代の演奏会および音楽団体」。

これら外国旅行が、クーラウの精神活動に深く影響を及ぼしたことには疑いがない。

第 1 回のドイツ旅行の後、作曲したのは『ルル』である。確かにこれには、彼が見聞きし、感動を受けた印象に基づくさまが反映されている。又、1825 年の旅行の後では、注目すべき劇音楽を 3 つ作曲した。すなわち、C. J. ボイエの『ウイリアム・シェイクスピア』の付帯音楽〔1826〕、同じくボイエによるオペラ『フーゴとアーデルハイド』〔1827〕、そして、J. C. ハイベアの『妖精の丘』〔1828〕である。劇作活動は、クーラウの最も好きな仕事であった。作曲活動そのものが、生き甲斐であったが、中でも、熱中する対象は劇音楽であった。劇音楽の仕事を始めたとなると、他のことはすべて放り出して、熱中してしまい、いつものような出版社に言われるがままに仕える作曲家とはもはや別人であった。劇作品を重視していたことは、前に述べたように、それがウィーンでは最高の娯楽であったことによって明らかであるし、より高給な報酬が得られたなら、デンマーク宮廷劇音楽作曲家こそ、自分の本来の立場であると言いたかったことであろう。この肩書きは嘗ては用いたことがあるのだが。クーラウはいろいろな領域の仕事をしたが、彼の音楽の特色は明らかに熱狂と飛翔で、これこそ劇音楽作曲家のトレードマークでもある。クーラウが序曲作曲家としても素晴らしいのは、当然のことである。オペラの雄大さと美しさ、華やかさを前もって知らせる役目を持つ序曲に関する話はこの後述べることにする。諸楽器の音色、響きに

対して繊細な感覚を持ち合わせていたことが、器楽音楽分野で、クーラウを傑出した作曲家とならしめたことは間違いない。クーラウがものすごい早さで、一気に書き上げるのを見て驚く人たちには、「自然に筆が動くのですよ」とよく言ったものだ。実際、彼の手になる序曲はどれも、生まれつきの天性を証明する作品で、いかなる研究、学問も、天性の代役を務めることはかなわなかった。これらの作品の全容をオーケストラが精緻な手際で表現出来るようになること、すなわち多彩な音色、音のあやを引き出すことができるようになるのは、後世になって初めて可能となることであった。だが、クーラウが、とりわけオーケストラ音楽に習熟しているのは明らかで、もし、10、20 年、生きながらえることが出来たなら、クーラウは多くの人の羨望の的となったことであろう。これは単に、音の響きに関するのみならず、音楽形式に関しても傑出した作曲家であったからである。『ウィリアム・シェイクスピア』序曲は、代表作品であるが、その形式的観点からの評価が高い。この序曲は専門的知識の必要な対位法様式で書かれているが、クーラウを手こずらせるどころか，お手の物の技法である。しばしば見過ごされてしまうが、対位法の楽曲の場合、まるで機械装置がカチカチと音を立てているに過ぎないものがあることだ。対位法の曲を終わりまで念入りに仕上げるのは、とても難しく、夢の中なら我慢もできようせめぎ合いに似た、前へ進行したくても、作曲はなかなかはかどらないのである。ところが、いとも軽々と流れて進む『ウィリアム・シェイクスピア』序曲の音楽を聴くと、その裏にある学識も、音楽の複雑さも忘れてしまい、オベロン、タイタニアとともに空中を飛んでいるかに思える程である。クーラウの音楽で、大胆な跳躍、自由な闊達さがこれほど美しく展開されるのは、序曲の他にはない。『ウィリアム・シェイクスピア』序曲は恐らく、クーラウの最高の作品と言える。片や『妖精の丘』序曲は最も人気の高い作品であろう。『妖精の丘』序曲は国家的重要性を得ているほどに評価されており、国家的な行事の祭典音楽としていつも選ばれる曲である。

練達のウェーバーは、序曲の作曲の際、オペラの主なメロディーを中に織り込んで、それらが、全体の中で重要な部分であることが浮き出るようにしたように、クーラウも、『妖精の丘』序曲で、同じように工夫している。この曲のメロディーには、国民的メロディーとなっているのもあり、全体にとても壮麗に仕上がっているばかりか、自然と、国歌「王は高きマストの傍らに立てり」に流れ込んで終りを迎える組み立てで、序曲全体がデンマークと国王を賛美する祝典詩の趣を呈している。このような、国民に愛され、デンマークの最高の音楽詩として敬意を受けている名曲に匹敵するものは、ウェーバー作曲の「God save the King」で終結する祝典序曲のみであろう。

『フーゴとアーデルハイド』では『エリサ』ほどの成功を収めることは出来なかった。奇抜な構想で、貴族である騎士が、愛する人の名誉を守らんと、盗賊に身をやつし、捕らえられるというものである。多くの人に大反対され、ワイセなど、このオペラの作曲を持ちかけられた時に答えて言うには、泥棒のごとき輩と見なされる人間に、細やかな感情を込めて音楽を付けるなんて、考えただけで気分がわるくなってしまうと。しかしクーラウは、この作品はそんな法外なものではなく、様々な状況が展開する作品なのだから、それなりにまとまったものが作れると言う意見であった。残念ながら、観客の受け取り方は、クーラウはやりすぎと言う雰囲気であった。つまり、騎士に対する虜囚らの嘲笑、侮蔑的言辞が反感を買ってしまったのである。ワイセはこの場面をトルコ風の音楽パロディーに仕立て、ピアノで弾いて見せたことがあった。ワイセのパロディーは確かに憎めない曲ではあったが、居合わせたクーラウをいたく悲しませてしまった。望むべくは、この生き生きした、実に劇的な音楽がちりばめられている作品が、もう一度、新しい聴衆に評価して貰う機会が欲しいものである。盗賊二人の陽気な場面など、ロッシーニ流のユーモアに溢れた秀逸なものだし、輝きに満ちた素晴らしい序曲も反響をよぶに違いない。これに対して、『ウィリアム・シェイクスピア』や『妖精の丘』では、大成功を収めたのは疑う余地がない。ことに『妖精の丘』は、1828 年 11 月 6 日、フレゼリク Frederik 王子とウィルヘルミーネ Wilhelmine 王女の婚礼に際して初演されたのであるが、依然として熱狂的な喝采を博しており、今日に至るまで、大当たり間違いなしの極めつけ演目である *。

* 注. 『妖精の丘』のコペンハーゲン王立劇場公演は 200 回に達した。昨シーズンだけで 50 回以上、大入り満員となり、初日から 25 回まで、プレミアム付きの割増料金であった。

『ウィリアム・シェイクスピア』は、そもそも脚本家ボイエがシャルに作曲を依頼し、ロマンス一曲以外は、合唱と舞踏だけの構成にするつもりであった。このように提案されたのだが、折り合いがつかず、公演が急がれたので、シャルの曲は、「マクベス」のバレエの場、夢の光景に用いることに決めたところクーラウとあまり近い関係を望んでいないシャルは、苛立たしく思い、他人も手を貸している音楽であるとは侮辱であると異議を唱えた。クーラウはそれで、ボイエの方針に従って、夢の光景の構成をかえて、合唱曲の変奏でシェイクスピアが夢心地となって眠りにつくことにして、クーラウが関わる音楽は眠りの箇所だけとし、夢の場面には触れないようにした。『ウィリアム・シェイクスピア』は大成功であった。詩人ボイエも、

シェイクスピアの月光場面の人物を単に舞台に載せたのではなく、生き生きした性格を付け加えることが出来て満足であった。

実際、この作品には溢れる詩情だけでなく、偉大な天才詩人シェイクスピアに寄せる深い思い入れが表れている。ただ、今日の演出では、主人公におおいに月光を浴びせているのは事実で、舞台は光彩を放つものとなっている。クーラウの音楽の効果もあって、オベロン、タイタニアが妖精ともども主役であることを表出してくれているのである。この曲は、初演後30年たって、再び演目に取り上げられ、ミカエル・ヴィーエ Michael Wiehe による詩的な演出とあいまって、この音楽が一連の公演を重ねるほど観衆を引きつけるものであることが証明された。モシェレスはこの作品に大いに興味を持ち、ロンドン公演を計画したほどであった。妖精の合唱のあちこちには美しいロマンチックな響き、森の詩が溢れており、『盗賊の城』の初めの場面と同じく、クーラウが真のロマン派音楽家とほとんど差がないことを表しているように思える。モーツァルトがクーラウの理想であることが『ウィリアム・シェイクスピア』ほど、はっきりわかるものは他にない。ウィーンでの『魔笛』公演の後、ひと気の去った劇場に一人座っていたクーラウは、モーツァルトの天賦の才に心を奪われ、このときの思いを片時も忘れることはなかった。この印象が、『ウィリアム・シェイクスピア』ではっきりと具現化されるのである。モーツァルト流の理想像は確かに『ルル』にも秘められているが、『ウィリアム・シェイクスピア』では、それが遺憾なく実現されている。この序曲は、『魔笛』序曲を手本としたもので、クーラウの全作品中、他の序曲でこの曲の域に近づくものは多くはない。あちこちの美しい妖精のコーラスのメロディーを聴くと、『魔笛』の童子の歌が思い浮かんでくる。

クーラウが美しい音楽についてしばしば述べた言葉がある。「メロディーの気高さ」という表現である。まさに彼を虜にしたのは単純、簡潔なる音楽の純粋さであった。気に入ったメロディーに没頭し、愛着を覚えた平明なメロディーに取り組むときには、全く倦むことがなかった。これは、与えられたテーマからファンタジーを作り出す、ピアノ即興演奏家としてクーラウが傑出していたことと関連があって、どの変奏に移るにせよ、単純なテーマが、常に基底をなしており、その上、きわめて多彩な変奏を生み出す彼の才能に連なることである。ファンタジーとか変奏曲はヴェールのようなもので、一見、テーマを隠しているが、変奏を通して、テーマ自体が、それだけ永い時間、しっかりと時空につなぎ留められることになるのだ。民謡に興味を持つのも、気高きメロディーをいつくしむ一方ならざる彼の愛着の現れであろう。前述の様に、かつて1815年スウェーデンに赴いたおりにスウェーデン民謡によるファンタジーを作曲している。またオーストリア民謡の変奏曲の作品もある。カルカッタ在住のクーラウの兄が、コペンハーゲンを来訪したが、インドの歌や舞曲を何一つ持参しなかったので、インドのメロディーがあれば最高に興味があったのにと大いに嘆いたという。『妖精の丘』は専ら民謡からなる音楽である。この作曲に取りかかったクーラウは、民謡の、特にデンマーク、スカンジナヴィア民謡の特質、特異性の世界にほんの1日、居れば済むと言うような作曲家ではなかった。ハイベアが書き留めるよりずっと前から、これらの民謡をクーラウは知っていて、愛着をもっていた。そうでなかったとしたら、ほんの数ヶ月の急ぎ仕事で、かくも完成された作品の作曲は不可能であったろう。いかに作曲家がクーラウという、驚くばかりの迅速さで仕上げる能力の持ち主であったとしても。このようにして、クーラウは最高に美しく、まさに国民的な演劇を作ったのである。デンマーク人すべてにとっての財産であるとの評価が、この作品のトレードマークである。歌曲につけたメロディーは殆どすべて、民衆のもので、クーラウ自身のものではない。民衆の中から抽出し、民衆に戻したのだ。楽器にふさわしい形にし、上品な曲に仕上げ、新たな民衆精神を吹き込んだモティーフで豊かにしたのだ。どこがクーラウのでどこが民謡かとたずねる人は誰もいない。誰も感知できないのだ。様々の調べが全体として奏でられているからなのだ。『妖精の丘』付帯音楽ほど、国民のものという点から、大きな意義を持ち、普遍的な力を持った作品はない。このような音楽作品を示せる民族は他にはないのである。この曲は国中隅々まで浸透していて、デンマークの歌を歌うところならどこでも歌われている。この曲を通して、此処にデンマーク音楽ありと、我々は皆完全に一致して理解している。その上、『妖精の丘』は作品100という目立つ番号なのも素晴らしい。クーラウとデンマークとの結びつきは古くかつ深い。デンマークの情景、デンマークの詩人のために作曲した人として、デンマーク民族の調べ、デンマーク民族精神に則って完成した『妖精の丘』を通して、クーラウはデンマークと一体となったのである。

最後の劇音楽作品となったエーレンスレーヤーによる喜劇、『ダマスカスの三つ子の兄弟』付帯音楽の話が出た頃、ドイツ旅行を再び計画した。これが最後の旅となる。仲の良い友人であり、何かにつけ援助をしてくれたピアノ製作者ハスハーゲン Hashagen が同行し、1829年5月から8月まで、ベルリンとライプツィヒを訪れた。書簡によればベルリンでは怠惰飽食の日々を過ごしたという。劇場がもっとも気に入ったこと、いろいろなオペラを鑑賞したが、中でもスポンティーニの最新作『ホーエンシュタウフェン家のアグネス』を見たこと（1829年7月ベルリン初演）、ロシア皇后来訪を機に上演され

たこのオペラは、信じられないほどの豪華絢爛たる演出で行われたことなど、印象的に記している。ライプツィヒでは有名な出版社ペータースを引き継いだばかりのベーメの知己を得た。ベーメは別荘にクーラウを招待しそこで、新作の4本のフルートのための作品（訳注：op.103）が演奏された。二人は以後親交関係にあったが、ベーメに関する限りは、出版社側に特別の影響を及ぼすようなものではなかったように思える。楽譜出版社の知人全員に共通する特徴でもあるようだが。帰路はハンブルグ、キール経由であった。ともに多数の友人が居住し、過ごすのが楽しい町であった。ハンブルグには楽長クレープス、A. メットフェッセルが、キールには音楽監督アペルがいた。帰国後出した書簡には、「今度の旅は美しい夢のようでした。このように夢見ることがまた出来るのを願っています。」と書いている。

帰国後直ちに『ダマスカスの三つ子の兄弟』の作曲を始めるつもりでいたが、エーレンスレーヤーの準備ができておらず、代わりにピアノ四重奏ト短調（訳注：op. 108）に取りかかることにした。他に H. C. アンデルセンの魔法のオペラ『鴉』の作曲をクーラウが劇場から依頼され、切望されていたことが、法学部学生 F. コリン Collin 宛の 1830 年 1 月 12 日付けの手紙でわかる。これまでのたびたびの失敗で用心深くなっていたようで、この演目は既に各所で企画されたものであること、外国でのオペラ化は全く成功しなかったことを指摘して、この仕事を引き受けるのは躊躇すると記している。この作品はそれで、J.P.C. ハルトマンの手に渡った。国民的作品の上演に、現在では考えられないほどの熱意を持っていた当時の劇場は、投稿作品の中から採択されたジングシュピールの作曲を確保するのが、うまく行かず苦境に陥ることがよくあった。理由は様々だが、クーラウもワイセもひどい失敗をした経験から、作曲を辞退することが稀ならずあった。1827 年 3 月 5 日付けの劇場支配人による国王宛の報告書には、ボイエの『フーゴとアーデルハイド』、エーレンスレーヤーの『ポートレートと胸像』、『愛の復讐』の三作が上演不能なこと、600 リグスダラーの条件でなければ『フーゴとアーデルハイド』を、クーラウは引き受けてくれないこと、が記載されており、この金額をあわせて予算計上の要求がされている。2 年後、こういった問題を真摯に考慮し、1829 年 3 月 28 日付けの決議には、クーラウ、ワイセともに、ジングシュピールを 2 年に 1 曲、作曲することを義務付けた 1821 年の決議が再度、明記された。書簡には、この数年間で、エーレンスレーヤー作のうち、興行監察官認可になる上記の 2 作が放置されたままになっているが、ワイセは主題が趣向にあわないからと、クーラウは特別報酬が必要であるからと、作曲家の拒否で上演がかなわぬのであると記載されている *。

* 注：『愛の復讐』は結局、作曲されなかった。『ポートレートと胸像』は後にベルググレーン教授が作曲した。

作曲家と脚本の関係を物語る話がある。これは次の陳述書、『ダマスカスの三つ子の兄弟』に関するクーラウによる 1830 年 4 月 3 日付けの覚え書きに明らかである。「エーレンスレーヤー教授の新作喜劇についての、3 月 1 日付け御貴翰拝受仕り候。下記の件につき、恭順至極に存じ候。とり急ぎご返答申し上げ候。・・・かくの如き短期間では、作曲は私には到底不可能ですし、誰か他に有能な作曲家がいるとも思えません。序曲も必要でしょうから 3、4 ヶ月のお時間がいただけるならば、喜んでお引き受けいたしたく存じます。また台本は全体の完成品が必要かと存じます。作曲を要する箇所のみの稿本では歌手の性格や、劇場効果等々に関わる事柄を決定し得ません。誠に勝手ながら、エーレンスレーヤー手稿は閣下にご返却申し上げます。敬具」。4 月 23 日付けエーレンスレーヤー宛の書簡でも、完成品を要求し、歌唱担当の男優、女優の選定について意見を求めており、「さもないと、来るシーズンを開催するために、準備万端整えるのは不可能です。」と書いている。1830 年 9 月 1 日に初演された『ダマスカスの三つ子の兄弟』の音楽は、クーラウの他の名曲と同じく、新鮮で活気に溢れたものであるが、各場面で喝采を受けるにはいささか不適切と評価されている。曲目のいくつかは、クーラウの死後しばらく経った 1839 年の『アラディン』Aladdin（その中の東洋風場面で）の上演に際して用いられた。エーレンスレーヤーの美しい詩が朗唱されて大喝采を博し、クーラウ作品からの選抜はブールノンヴィル Bournonville の秀抜なアイデアによるもであった。オーワスコウによればその音楽はあたかもそのために作曲されたかのようで、『ダマスカスの三つ子の兄弟』の 2 曲以外に『魔法の竪琴』、『エリサ』から何曲か、『フーゴとアーデルハイド』と『ウィリアム・シェイクスピア』から 1 曲が用いられたと述べている。

第６章

アシステンス教会墓地のクーラウの墓

クーラウの両親は 1814 年から、おそらくは 1813 年以降、コペンハーゲンのクーラウの許に同居していたことは前述した。デンマークに来たのは、そもそも政治情勢に理由があった。1813 年にダヴー (Louis-Nicolas Davout) 率いるフランス軍にハンブルグが占領され、食料不足を理由として、住民の多くが追放されたのである。クーラウの家族もこの災難にあったと想像できる。1815 年 7 月 15 日付けアンドレアス宛の書簡にクーラウの父が「おまえの弟フリッツのところでなかったら、悲嘆困窮の憂き目に遭って死んでいたに違いない。私の収入ではやっとパンが買える程しかなく、マグダレーナの稼ぎはやうやく自分の衣服が賄えるくらい」と記している。この手紙の後、クーラウの両親はハンブルグに戻った形跡があるが、1818 年以降はずっとコペンハーゲンの息子と一緒に住んでいた。マグダレーナ・クーラウ * は語学と音楽を教えており才能豊かな博識ある女性であった。1825 年ころ、兄クーラウの家を離れてオールボー Aalborg に移り、数年間、私立学校校長、音楽教師として立派な実績を残した。毎年、コペンハーゲンの両親、兄の許を訪れ、コペンハーゲンには女友達が大勢いた。

* 注：1835 年オールボーを去り、以後ライプツィヒで過ごした。彼女は陽気なじっとしていられない性格の持ち主で度々コペンハーゲンを訪れ、長逗留をした。

マグダレーナに替わってクーラウの従妹がある時期同居したことがあった。1822 年カルカッタ在住の音楽家である兄の 12 歳になる息子フリードリヒがデンマークでの教育を受けることになり、家族が増えた。クーラウはとても興味をもって甥の面倒を見た。「兄が私の許に息子を置いて行きました。この子も音楽に精進しており、大変うれしいことです」との手紙がある。1826 年、クーラウは家族ともどもリュンビュー Lyngby に移住し、1831 年秋まで住んだ。経済的な要因もあろうが、田園生活の楽しみ、加えて、晩年になるにつれ次第に強まる孤独願望も、理由なのであろう。首都コペンハーゲンにおける友人知人との交友関係をすべて断ち切るほどだったのだから。クーラウは、陽気な仲間との交流がなかった訳ではないが、静かな寡黙の性格であり、加えて、晩年は何か閉鎖的で、自身の存在自体に悩むところがあった。クーラウは終生結婚しなかった。結婚を勧められると「そんな暇は持ち合わせないよ」といつも答えるのであった。何か深い理由があってのことと思われるが。話によれば、ハンブルグの青年時代、失恋を経験している。この痛手を思い流すことができなかったのだと。ギュンテルベアの談話に基づく話で、ギュンテルベアの友人、詩人ルートウィヒ・ベッチャー Ludwig Bödtcher の伝えるところによると、クーラウの恋の対象は女優のトムセン Thomsen 嬢、後のツィンク夫人、デンマークの舞台にも登場したことのある愛すべき人柄の女性であった。クーラウが女性についての所念に触れるのは極めてまれなことで、ギュンテルベアと仕事をしていたとき『ルル』のシディについて、突然、「こんな女性がいいな、こんな妻が貰いたかった」と言い出したことがあったという。それで自分の運を託したのは、たゆみない、緊張した仕事であった。朝８時から２時、３時まで、時にはさらに、午後から夜遅くまで仕事をする。時には、夜半に起き上がって思いついたアイデアを書き留めることもあった。コペンハーゲンの友人を日中に訪問したときの話だが、コーヒーが出されたのに、『妖精の丘』のアイデアが突如浮かんだといって、すぐさま友人宅を辞し、徒歩でリュンビューの自宅に戻って机に向かうということもあったという。クーラウは楽曲の着想が浮かぶと、それに極端に没頭し、放心のあまり、話しかけられても一言も耳を傾けないということもあった。思考を占めるのは終始音楽で、音楽的な面が感知できるものなら何でも相応の興味を示すのであった。ドイツやデンマークの至高の詩歌を愛し、ロマン的なもの、夢想的なもの、騎士道精神に深く身にしみて感動するのであった。ヴィーラントのオベロン、シラー、エーレンスレーヤー、ゲーテのロマンスや抒情詩を耽読するのが好きで、メロディーの構想をつかむことがあった。詩的とは言えないテキストを与えられて、満足の行くメロディーが直ちに浮かばないときなど、類似テーマの美しい詩で感動を経験したときの情感を想い出しては、「これでやっとこの下手な詩に作曲できた」と快活に笑って、駄作の作詞者をからかって面白がることもあった。しかし、クーラウが深く感動した詩には、逆にめったに曲を付けたことがない。作曲を勧められても、いつも「この詩はあまりにも素晴らしい」というのだ。おそらく、こういう名詩の作曲をしても、なかなか満足しなかったからだろう。シラーの『歓喜に寄す』を大カンタータとして作曲したことがあった。このピアノ・スコアの手稿が現存している *。しかし、このカンタータは意に添わないものであったようだ。

* 注：1813 年５月 17 日付けクンツェン教授宛国王宸翰にて、国王献上のクーラウ作曲、「シラーの詩によるソナタ」の保管、それに関する意見の陳述、および適当な機会での演奏の下命があった。これが例のカンタータであることは間違いない。

訳注：このピアノ・スコアは図書館には現存しない。いくつかのパート譜が残るのみ

クーラウは作曲対象の詩作に関しては、なかなか満足しなかった。前述の様にギュンテルベアに『ルル』のことで、どんなに苦労をかけたか、バッゲセンも言うように、『魔法の竪琴』のあちこちをクーラウのために書き換え、脚色しなおさなければならなかったか、我らも知るところである。晩年の話だが、ドイツから送ってきた詩の多くをクーラウは返却してしまったという。これについては、詩の韻律法と陰鬱で暗い情趣の故に使えないと説明していた。後半の拒否理由はドイツのロマ

ン派にはおそらく奇異に思われたであろう。シューベルト流、シューマン流の作曲家なら陰鬱な情趣というだけで作曲したことであろうに。しかしクーラウは憂鬱とか自己分裂的とかの芸術家とは全く正反対の立場の作曲家だった。コペンハーゲンに来た頃、クーラウは「一般音楽新聞」の、言ってみれば批評家を担当しており、編集者の求めに応じて、時々音楽ニュースを投稿していた。彼の批評は正確かつ的を得たもので、少しの変更も加えられることなく掲載された。1812 年には、連載で冬季公演の芸術活動の記事を執筆している。第 4 号には、「私は自分自身のことは論評できない」と書いている。現存している書簡を見ると、編集者も気配りを見せて、「ハンブルグ出身のクーラウ氏はピアノ演奏の達人で、作曲家としてもすでに高名である。」と付け加えている。これを読んでも、クーラウは穏やかな、人情味のある批評家であったことがよくわかる。そもそもクーラウは出版社ブライトコップフ・ヘルテルに配慮して、この仕事を引き受けたのであって、作曲家でありながら、批評もするというこの役目はきつい職務であることは判っていることであり、まもなく辞めてしまった。ヘルテル社宛の書簡に、「貴社がこの仕事を委嘱されるに当たって、ご期待に添う人物を存じています。音楽についての著述を歓迎する人で、時折音楽に関する公開講義も開講しておられる、当地のツィンク音楽学教授です」と記している。結局のところ音楽批評を引き受けたのは、クーラウの推薦で、ゲッツェ Götze に決まった。

読書の時でも、音楽が重きを成していたことはすでに述べたが、実際あらゆることにクーラウは音楽を追い求めていた。クーラウの耳にある水漉し器に滴る水滴に耳をそばだてて細心の注意を払って聴き、中にあるメロディーを聴きわけ、それが他のひとにも聴こえるようにしたいと懸命に努力したのである。クーラウは森を散歩し夜啼鳥のさえずりを楽しんだ。動物園の丘に行くのも音楽のため。ここでは一時、フランスの有名な鼓手長がさまざまの手法で太鼓を操り、名人芸を聞かせていた。これにクーラウは興味を抱いたのである。ハイベアの喜歌劇に出てくる老学者トロップと同じ思いだったのかもしれない。動物園の丘では、「鼓手長をただで楽しめ気も晴れる」と。

確かに、金がかからないことも副次的な意味があろう。動物園の開催中は、パイプをくわえ、忠犬プレストを従え、リュンビューから足繁く通ったのであった。シャルロッテンルンド Charlottenlund の森での狩人音楽が催されると、クーラウは決まって通ったものである。日曜日には、クーラウ宅には訪問客が多く、弟子も幾人か、レッスンのあとクーラウとともに過ごすのが大好きだった。午後には家族打ち揃って訪問客と共に庭に出てコーヒーを楽しむ。皆それぞれパイプを燻らす。クーラウも友人も父も、その上、母も！。クーラウの母はある病気の治療で、喫煙療法を施されたが、調子が良く、この治療を続けた次第。こうやって、話がはずんだ。クーラウは聞くのも自ら話すのも好きだった。クーラウ宅では、ボン出身のドイツ人の娘を雇っていたことがある。この娘とはドイツ語で話ができると大変満足であった。この娘も世辞万端に話が及ぶ様な時には、いつも座談の同席を求められていた。洗い物があるとかの用事があるときには、それを済ませて、この娘が参加できるようになるまで、クーラウは話を控えて待つのであった。夜の楽しいパーティーは、トディ（カクテルの一種）が一杯やれるとなるとクーラウは元気一杯。クーラウの弱点は宴会で度を過ごしてしまうことであった。ある会合で、飲み過ぎ、次回の席ではとてもきまりが悪く、こうやって謝ったのである。頼まれもしないのに、ピアノの蓋を開け、『酩酊知らずの男なんて最低』を弾いたのだ。酒はクーラウにとって必需品であった。昼飯時にメドック半分を飲んでしまうし、（ハンブルグの銘酒）オックスホフトの赤を酒蔵に仕入れた時など、まさに大喜びだった。音楽家とのつきあい以外では、素朴、淳朴な連中が最高の仲間であった。1829 年の旅行の際、ライプツィヒの兄に、友人が同行すると伝えたところ、兄はてっきりワイセやエーレンスレーヤーの様な著名人がやってくるものばかりと思い込んで、お近づきの栄に浴したいものと返信を書いた。クーラウは答えて、「友人とは誰だと思ったのですか？律義なブレーメン人、コペンハーゲンでピアノ製作をやっているハスハーゲン氏です」。この人物はクーラウの晩年、最もつきあいの多かった一人で、「信頼のおける大切な親友」と手紙に記している。クーラウは、人を疑うことを知らず、愚直なところがあり、若い音楽家で、秘めた才能があるとなると、親身になって面倒を見てしまうのだった。芸術上の高貴なもの、美しいものなら何でも、感動したときに出てくるのは、全く簡潔な言葉遣いであった。クーラウには野心などなく、愛想のいい人柄そのもので、小さな心遣いを大切にし、友人から手渡されたものは小さなものでも細心の注意を払って大切にした。また友人の意見は忌憚のない痛言でも受け止めて耳を傾けた。とある会話で、『魔弾の射手』をやっきとなってこき下ろしたところ、ある友人が、こう言った。「ウェーバーの全作品を否定するのは結構、詰まる所、こういう抜群の作品を書きさえすればいいんだよ」。クーラウはちょっと考えて、いつもの癖で襟巻きをいじりながら言った。「もっともなことですな」。クーラウは音楽を業としない人の意見を聞くのが好きだった。「音楽家が言えることは自分で言えるよ。聞きたいのは生き生きした新鮮な解釈なのだ」とよく話していた。暮らし向きは楽でなく、気苦労が多かったのに、いつでも世話を焼くのが好きで、クーラウの門戸をたたいて無駄だった貧者は一人

もいなかった。クーラウのリュンビュー居住時代は、遍歴の徒弟職人にとっては正に黄金時代で、クーラウはいつも思い遣って彼らに何がしかのものを与えたものだった。コペンハーゲンにやって来た貧しい H. C. アンデルセン少年への寄付金署名者の中には、クーラウの名がある。しかし、アンデルセンはクーラウに会ったことは一度もないことは記しておく必要があろう。

クーラウ宅を訪れた人はよく見かけたのだが、家にいるときはいつもガウンをひっかけ、決まってパイプをくわえていたものである。シャツは輝くばかりの純白で、着衣は芸術家風の、自由さ、気軽さで、無頓着であったが、いつも小奇麗にしていた。クーラウは、日常の規律さにはなじまぬ芸術家の気風が髄からある人ではあるものの、芸術家の実務にかかわる仕事上の面では、几帳面で周到だった。残されている書簡草稿帖を見れば一目瞭然である。ライプツィヒの商人フリードリヒ・クーラウ（アンドレアスの息子）の所有になる草稿帖には、1829 年から死亡時に至るまでの書簡草稿が収録されている。時を経るにつれ、抜き取られ、好事家などの手に渡り珍重されている手稿も少なくないが、この草稿帖は大変几帳面に記されており、クーラウがいかに先方との交信に当たって周到に処理しているか、返信がなければ催促したり、自分の作品を大切にして、収益をあげるのに一生懸命気を配っているさまが読み取れる。手紙の大半は仕事上のもので、個人的な話は多くない。クーラウの書簡は全てドイツ語で書かれている。書くのも話すのもいつもドイツ語だった。手書きの書簡は実に見事な筆跡で美しいのだが、走り書きの草稿帖の文字も読みやすい。草稿帖に書かれている内容は、清書した書簡に正しく正確に転記されていて、草稿帖にある追伸文までそのまま書簡に出てくる。はっきりした訂正や変更のある書簡もいくらかはあるが、他は全くないのも同然である。訂正箇所はたいてい、できるだけ正確な言い回しを求めたもの、あるいは、頭語、結語のどれがふさわしいか、謹啓、恭啓、拝啓かなど、決めかねたものが多い。書簡草稿帖から、およそ 30 曲の作品についての出版社の指定、その作品番号目録が明らかになっている。

クーラウの風采は堂々としていたとよく記されている。オーワスコウは、目鼻立ちのはっきりした品のある思慮に満ちた容貌と強調しているが、優しい感情、誠実な人柄、男性的な持ち味をはっきりと表す大きな青い目のことに触れており、すらりと均整のとれた容姿、軽やかにしてしっかりした歩調に、一種の、天性のリズム感があって、そこに、クーラウが純粋そのもので、自らの使命を果たすのに、全能力を傾注し、全精神をかけて献身している様子が読み取れると言うのだ * 。

* 注：C. ホルネマン Horneman の手になるクーラウの等身大胸像のパステル画には 1828 年と記されている。この絵は画家の孫で、作曲家の F. ホルネマンが所蔵している。1832 年と記されたこの絵の複製はコペンハーゲンのワイン業者モンスター (Mønster) が所蔵し、大変よく似ているとのことで、多数のリトグラフの原画となった。メダル製作者クローン作の胸像もこの絵に拠る。有名な肖像画の一つに 1838 年製エミル・ベーレンツエン Em. Bärenzen のリトグラフがある。やや丸顔過ぎるがナイトガウンを羽織った姿の像。他にルートヴィヒ・フェール Ludw. Fehr（シニアー）による正面像のリトグラフがある。(ライプツィヒ在住のフリードリヒ・クーラウ所有のきれいなミニチュア画もある Thrane 原文)。そして、大物のビール醸造業ヤコブセン Jacobsen 依頼になる彫刻家シュタイン Stein 製作の胸像があり、国立劇場ロビーに展示されていた。C. ホルネマンの肖像画に基づいたものである。クーラウの頭髪は豊かで、柔らかな亜麻色だった。母親そっくりであった。

最期のころのクーラウには感情に陰りが目立つようになった。1829 年のモシシェレス宛の手紙にもすでに、哀感と秘められたメランコリックな気分が感じられる。「お元気で！　運に恵まれた貴殿よ！」と文を結んでいる。実際、幸運は彼に背を向け、クーラウは不安と病に打ちひしがれるのである *。

* 注：オーワスコウは語る。大衆にまた、音楽界で、彼の作品が人気を博したことによる成果と言えるが、劇場の幹部や国王の関心を引くようになったこともクーラウを喜ばせるものではなかったようだ。脇に押しのけられることも度々あり、そのような事態を深刻に受けとめて少なからず暗く憂鬱な気分に陥ってしまうのだった。この心理状態が後年、元来は強健だった身体をこわす一因ともなった。

1830 年、クーラウは両親を亡くす。父は前駆症状なしに、突然 1 月 21 日に、母は 2 週間程患った揚げ句、11 月 13 日に亡くなった。クーラウは永いこと両親との同居に慣れ親しみ、結びつきを堅くして来た。母とは一層のことであったろう。手紙の中で、呻吟して言う「1 年のうちに 2 度も埋葬なんて！　過酷なことです」。

この 10 年前、1820 年、両親の金婚式のお祝いが催されて、クーラウの送ったお祝いの歌は真情を表している。「金婚の日を飾るは孝子の歌、記念の冠を織りなすは子等の捧ぐ愛」

父の死後半年ほどして、兄アンドレアスに宛てた手紙には、「有り難いことにお母さんは元気でおります。記憶は怪しくなっ

て来ましたが、日永、家の中、鶏小屋を行ったり来りして、退屈はしない様子です。あと何年か永らえて欲しいものですね。今年の夏の旅行は、母のことがあるので、止めにしました。」と書いている。母が亡くなった時には、「アマリエも私も、病に苦しむ母の傍らでどんなに胸張り裂ける思いであったか、想像に難いことでしょうが」と書き送った。父の死後、寡婦となった姉のアマリエがクーラウの許に来てくれたのは、大きな慰めであった。クーラウ自身も身体の調子が思わしくなく、咳と関節痛で部屋に閉じこもりがちになってしまった彼には、なおさら有り難かった。ところが不意打ちの様に悲しむべき災難が降りかかったのである。1831 年 2 月 5 日の夕方 5 時ごろ、リュンビューにある宮廷銅版画家プライスラー Preisler の農園で火災が発生した。折からの強風で、クーラウが住んでいたガラス職人ハルベア Halberg の家の方に延焼し、15 分で家は炎に包まれてしまった。クーラウは所持品の大半を失ってしまい、蒙った被害は甚大であった。楽譜は全て、シュヴェンケから寄贈されたモーツァルトの自筆譜を含め、自作の楽譜も大部分、炎の餌食となってしまった。完成間際の、長年の労作「通奏低音教本」も、印刷直前の最終校正を済ませるだけであったのに、燃えてしまった。傑作のいくつかも、特に、ピアノ協奏曲第 2 番は、言ってみれば老後の生活の足しにする積もりで印刷に回さなかったのだが、これも失われた。残ったのは老犬プレストのみであった。盲目となったばかりか聾となったプレストもまもなく世を去る。クーラウと姉アマリエは慌てふためいて逃げ出し、道端で雪と寒さに震えながら身の毛もよだつ光景を目の当たりにする他なかった。二人は、住居提供の申し入れをリュンビュー住民の幾人から受け、借家が見つかるまで、友人宅に身を寄せることにした。ところが、今度はクーラウが気息奄々となる有り様。風邪を引き、動顛と心労に加えて、ひどい喘鳴を伴う呼吸困難で生死の境をさまよう状態になってしまった。体力の衰弱はますますひどくなり、痛風による足痛が出てきたので、意を決してコペンハーゲンに搬送して貰い、フレゼリク病院に入院し、3 月 8 日から 6 月 7 日まで過ごす *。

* 注：クーラウが入院加療を受けるのはこれが最初である。この病院で死去したと普通言われているが事実ではない。

クーラウを案ずる友愛の情は並大抵でなく、ワイセはクーラウ支援コンサートを開催するし、クリスチャン皇太子は王宮にクーラウの住居を配慮された程であった。クーラウは深甚の謝意を表したが、これは実現しなかった。夏になって再びリュンビューに戻ったクーラウはかなり快復した様子で仕事は差し控える様に言われていたが、散歩や馬車で外出し、日中新鮮な外気に触れるのは元気回復に効があった。災禍、病を乗り越えて元気を回復し、大好きな旅行を心に描くようになり次の夏旅行を計画し始めた。兄宛の手紙に「心配ごとがなくなり、心も晴れ晴れとしてきて喜んでいます。これまで経験してきた喜びをしっかり意識しておく必要があります。悩みはすでに克服したのだからそんなことに一目もくれることはありません。」と書いている。秋口になって、クーラウは姉とともにコペンハーゲンに移り住んだ。ニューハウン Nyhavn（街側）12 番の借家である。ここで最期の日々を送り最後の傑作、クーラウ唯一の弦楽四重奏曲を作曲した。昔から、弦楽四重奏曲作曲家ともなることを考えていたし、ライプツィヒのベーメも弦楽四重奏曲出版にやぶさかでないと言ってきていた。しかし、ト短調ピアノ・カルテットの出版に際して難題が持ち上がり、しばし作曲を延期するという事態になった。ベーメが弦楽四重奏曲の作曲を依頼したのは確かだし、クーラウも同意を表して、1830 年 4 月 10 日、冬には、喜んで作曲に取り掛かると書き送っていたのだが、ベーメは半年後、稿料の大幅値切りを持ち出し、クーラウもそんな金額では作曲不可能と言わざるを得ないと言うことになってしまった。ここで、芸術支援者としてしばしば名の挙がるオーエペーターセンが助けに入ってくれた。1831 年夏の回復療養中に、この人はクーラウを大いに喜ばせたことには 6 曲の弦楽四重奏曲を注文し、十分な報酬を申し出て、出版の世話まで引き受けてくれたのである。永く心に抱いていた願いが適い、コペンハーゲンでの冬はこの仕事に没頭しようと決めたのだが、でき上がったのは 1 曲だけであった。この頃、当時交流が繁くなっていたパリのファランクからも、今後は小品は止めにして、大曲出版をとの書簡を受け取っている。クーラウもファランクから提示された目録に、ピアノ、ヴァイオリン、チェロの三重奏曲があるのは嬉しいと書いている。さらにオペラの大作計画も心に描いていた。人生が再びにこやかな色を帯びだして、彼は気分よく、くつろいで、誰も目にしたことがなかったほど、人生に興味を示すようになったのである。しかし、死によって計画は全て、水泡に帰した。14 日間、病床に伏し、過酷な闘病の後、1832 年 3 月 12 日、午後 7 時 45 分、クーラウは安らかな眠りについた。姉アマリエ・イェプセンがデンマークで出会ったものは心労と悲しみのみであったが、最後までクーラウの面倒を見てくれた。クーラウの死後、弟アンドレアスに「悲しいことばかりのコペンハーゲン滞在でした。弟の病気のことばかり思い出します。私が気になるのは亡くなった愛しいかたがたのお墓のことばかりです」とアマリエは書いている *。

* 注：アマリエはクーラウの残した家具調度など競売に付したあと亡夫の死後居住したことのあるライプツィヒに再び戻った。にぎやかな妹と違って、アマリエは物静かな思慮深い性格の持ち主であった。

クーラウの遺骸はフレゼリク病院の礼拝堂に安置され、葬儀は 3 月 18 日、聖ペトリ教会で執り行われた。クーラウの死に際して、ワイセ作曲、クリスチャン・ヴィンター作詞の荘厳な鎮魂歌が演奏され、ミュンスター Mynster が追悼文を朗読し

近衛音楽隊はクーラウ作曲によるクリスチャン７世のための葬送行進曲を演奏した。新聞記事によれば、葬送参列者はクーラウの近親者、親友、熱心な崇拝者たち、宮廷楽団員、王立劇場の俳優や歌手の幾人か、旧友、学生たちであった。高官の中からは子息を連れた一人が参加した。

当時の人々は、病院から聖ペトリ教会に移されるクーラウの棺に、新品の霊柩馬車が初乗で用いられたのに気付き驚いた様子だった。王立劇場では追悼公演を催してクーラウの栄誉をたたえた。エーレンスレーヤーの口上で始まり、『盗賊の城』が上演された。学生が喪章を付けて、最前列に並んだ。いくつもの音楽協会も記念会を行いクーラウを讃え、学生協会の追悼式典では、クーラウとの交友が深く仕事も共同したことのあるボイエ作詞、ワイセ作曲のカンタータが歌われた。墓地、墓碑の設計、手配が必要だったので、クーラウの遺骸は暫定的に聖ペトリ教会に安置された。墓碑はワイセの提案で、寄付金を募ることになった。募金はなかなか捗らなかったが、やがて音楽の女神ミューズの浮彫りを施した質素な墓碑ができ上がった。死後１年経って、1833 年３月 12 日、アシステンス教会墓地に埋葬された。親友のハスハーゲンは、クーラウの追悼記念に心をくだき、墓地の手配一切をやってくれた人物であるが、この埋葬式のことをクーラウの兄アンドレアスに書き送っている。「弟君のご遺骸を聖ペトリ教会礼拝堂から墓地への移送を一周忌の命日に当たるように手はずを整え、当日早朝、楽譜商オルセン氏、宮廷音楽家リューダース Lüders 氏、卸業ゲアソン Gerson 氏、それにラルセン Larssen 氏等には拙宅にお越しいただき、打ち揃って墓地に向かいました。ご遺体もちょうど到着となりました。よく晴れた冬の日の当日、雪で薄化粧した大地、そして居並ぶ我々に、黄金の日差しが当たり、私の依頼した仲間が弔辞を述べました。クーラウがいかに皆に愛され、素晴らしい偉大な友であったかと。とても良い一日でした。」

没後 30 年以上を経た今日でもなお、知己を得たものにはクーラウは忘れ難く、懐旧の中にあり続けている。知人にとってのみならず、我々全てにとって、優美な作品を通して、崇高な精神の証である音楽の中にクーラウは生き続けているのだ。今なお幼きものと共に歩み、学ぶものの友であり、民衆の寵児である。この高貴かつ純粋な天性の芸術家がデンマークに故郷を見いだし、デンマークの最高の音楽を作り上げたことは我々の誇りであり喜びである

山口和克、石原利矩　共訳
カット：成瀬　忠

インターナショナル・フリードリヒ・クーラウ協会
〒 107-0062　東京都港区南青山 2-18-5 アエリア南青山 801
Tel：03-5770-5220 Fax：03-5770-5221
E-Mail：ifks@kuhlau.gr.jp
http://www.kuhlau.gr.jp/

発行：2013 年 9 月 11 日

International Friedrich Kuhlau Society
Aerie Minami-Aoyama 801, Minami-Aoyama 2-18-5　Minato-ku Tokyo 107-0062, Japan
Sep.13, 2013

インターナショナル・フリードリヒ・クーラウ協会
〒 107-0062　東京都港区南青山 2-18-5 アエリア南青山 801
Tel：03-5770-5220 Fax：03-5770-5221
E-Mail：ifks@kuhlau.gr.jp
http://www.kuhlau.gr.jp/

発行：2013 年 9 月 11 日

Printed in Japan